法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-07

オランダにおける岩倉使節団

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社会労働研究
(巻 / Volume)
34
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
78
(発行年 / Year)
1988-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00006807

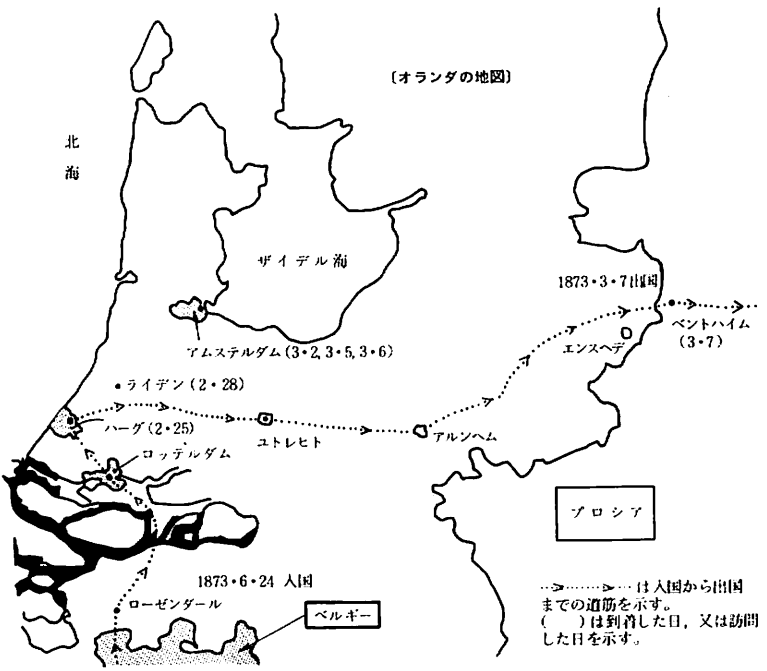
オランダにおける岩倉使節団

宮永孝

明治四（一八七一）年の岩倉使節団の米欧歴訪の旅は、『特命全権大使米欧回覧実記』（五巻、明治十一年刊）によって夙に有名であり、これまでに多くの論著が世に問われている。が、それらの多くは国内史料に基づいて書かれたものがほとんどであり、欧米各国の史料を利用したものはきわめて少ないのは否めない。筆者はかねてより幕末・維新期の遣外使節に関心をもち、これまでに遣仏、遣露、遣蘭使節等に関する海外史料を若干入手することができた。が、とくにオランダ関係では、文久の遣欧使節（竹内下野守一行）、幕末のオランダ留学生（海軍留学生）、オランダにおける岩倉使節に関するものを収集し、折にふれて小論、史料紹介の形で発表している。

本稿で紹介するものは、当時のオランダの新聞『アムステルダム新聞』(Amsterdamsche Courant)、『新ロッテルダム新聞』(Nieuwe Rotterdamsche Courant)、『ライデン新聞』(Leidsche Courant)、『スキーダム新聞』(Schiedamsche Courant) 等に載った岩倉使節に関する記事である。短い滞在期間中に急いで採取しただけに、見落とした記事も多々あったことと思われる。

岩倉使節団（正規の随員四十六名、私設秘書、従者、留学生を含めて百名以上）は幕末・維新期の遣外使節団のうちで最大の使節団であったといわれるが、[1] 明治四年十一月十二日（陽暦一八七一年十二月二十三日）横浜を出帆し、


〔オランダの地図〕
北海
ザイデル海
アムステルダム（3・2, 3・5, 3・6）
ライデン（2・28）
ハーグ（2・25）
ロッテルダム
ユトレヒト
アルンヘム
エンスヘデ
1873・3・7出国
ベントハイム
（3・7）
プロシア
1873・6・24 入国
ローゼンダール
ベルギー
……は入国から出国までの道筋を示す。
（　　）は到着した日，又は訪問した日を示す。

オランダにおける岩倉使節団の行程

年月日	入国・出国	関連事項
明治6・2・24(月)	(ベルギー) アントウェルペンを出発 ローゼンダール、ロッテルダムを経てハーグに到着 (オランダ入国)	
2・25(火)	ハーグに逗留	「オテル・ポーレ」に投宿。以後ここを旅宿とする。 午後十二時半、使節の主席五名、外務省を訪問。 午後三時すぎ、国王ウィレム三世の引見をうける。 同夜、外務大臣邸のレセプションに出席す。
2・26(水)	〃	ロッテルダムのフェイェノールトにある「オランダ蒸気船会社」を見学。
2・27(木)	〃	午後、海軍省を訪れる。のちハーグの森にある女王の別邸を見学。
2・28(金)	〃	ポンペ医師とホフマン博士に案内されてライデンへ遊覧。「王立古代博物館」「王立人類学博物館」などを見学。
3・1(土)	〃	ポルスブルックに案内されて「プリンス・マウリッツホイス博物館」を見学。午後、オラニエ公、ヘンドリック公、フレデリック公らの引見をうける。

年月日	入国・出国	関連事項
明治6・3・2(日)	ハーグに逗留	ポルスブルック、ファン・デル・タックらに案内されてアムステルダムに赴く。「王宮」「美術館」「水晶宮」ダイヤモンドの「研摩工場」その他を見学。夜、ファン・デル・タック宅の招宴に臨む。
3・3(月)	〃	フォールスホーテンの「王立オランダ金銀器製造工場」を見学。夜、「王立フランス劇場」で観劇。
3・4(火)	〃	岩倉と伊藤、外務省を訪れ、条約改正問題で協議。夜、ポルスブルック宅の晩餐会に出席。
3・5(水)	〃	スヘベニンゲンへ遊覧。木戸副使らはアムステルダムに赴き、「北海運河」「オランダ商事会社」「オランダ銀行」「トレスリング石板印刷会社」などを見学。夜、フレデリック公主催の晩餐会に出席
3・6(木)	〃	木戸副使、アムステルダムの「動物園」を見学。夜、ヘンドリック公の招宴に出席。
3・7(金)	ハーグを出発（オランダ出国）	午前八時、ライン鉄道で一同ベルリンへ向う。

一年十ケ月後の明治六（一八七三）年九月十三日帰国した。同使節団の目的は、『大日本外交文書』所収の「大使全書」第十一号にくわしいが、大きく分けて次の三つであった。

一、幕末に結ばれた条約締盟国と親交の情誼（友好関係）を厚くするために、訪問国の元首に、「国書」を捧呈し、かつ聘問（注・贈り物を持って訪問する意）の礼を修めること。

二、明治五年五月二十六日（陽暦一八七二年七月一日）が、幕末に結んだ条約の改正期限に当たるため、その予備交渉を行なうこと。

三、欧米各国の文物・制度をよく調査・研究して、日本の近代化の手本とすること。

使節団の主なメンバーは、――

特命全権大使（右大臣）……岩倉具視（四十七歳）

（副使）

参議……木戸孝允（三十九歳）

大蔵卿……大久保利通（四十二歳）

工部大輔……伊藤博文（三十一歳）

左から大久保・伊藤・岩倉・山口・木戸

オランダにおける岩倉使節団

外務少輔……山口尚芳（三十三歳）

（一等書記官）

外務少丞……*田辺太一（四十一歳）

外務大記……*塩田篤信（三郎、二十九歳）

同……*福地源一郎（三十一歳）

外務六等出仕……何礼之（三十二歳）

（二等書記官）

外務少記……渡辺洪基（二十四歳）

外務七等出仕……小松済治（二十五歳）

同……林董三郎（董、二十二歳）

同……長野桂次郎（二十九歳）

同……山内六三郎

（三等書記官）

川路寛堂（二十八歳）

（四等書記官）

外務大録……安藤忠経（太郎、二十五歳）

文部大助教……池田政懋

（大使随行）

式部助……五辻安仲

（理事官）

外務大記……野村靖（三十歳）

神奈川県大参事……内海忠勝（二十九歳）

兵庫県権知事……中山信彬（三十歳）

租税権頭……安場保和（三十七歳）

権少外史……久米丈市（邦武、三十三歳）
司法大輔……佐々木高行（四十二歳）
陸軍少将……山田顕義（二十八歳）
侍従長……東久世通禧（三十九歳）
造船頭……肥田為良*（浜五郎、四十二歳）
鉄道中属……瓜生震（十九歳）

（会計兼務）
戸籍頭……田中光顕（二十九歳）
文部大丞……田中不二麿（二十七歳）

＊は幕臣、この名簿は、田中彰『岩倉使節団』（講談社現代新書）と大久保利謙編「岩倉使節派遣並に復命関係史料集」（『岩倉使節の研究』所収）にもとづいて作成した。

いま挙げた者以外に大勢の随行員がいるが、煩雑になるばかりか、史料によっても人数に異同があるようなので掲げないことにする。次に使節団がオランダに入国するまでの跡をさかのぼり、それを略記すると次のようになる。

明治四年十一月十二日（陽暦一八七一年十二月二十三日）横浜出帆。

同年十二月六日（陽暦一八七二年一月十五日）サンフランシスコ到着。
明治五年七月三日（陽暦一八七二年八月六日）ボストン出発。
同年七月十四日（陽暦一八七二年八月十七日）ロンドン到着。
同年十一月十六日（陽暦一八七二年十二月十六日）パリ到着。
（同年日本で太陽暦を採用する。）
明治六年二月十七日（陽暦一八七三年二月十八日）パリを立ち、同日ベルギーのブリュッセルに到着。

ベルギーには約一週間滞在し、二十四日の午後アントウェルペン（Antwerpen——ブリュッセルの北四十七キロ、スケルデ川右岸の町）よりオランダに向った。『特命全権大使米欧回覧実記』（権少外史久米邦武と書記官畠山義成による視察報告）には次のようにある。

二十四日（白耳義ヨリノツヽキ）

三時四十分「アンウェルプ」駅ヲ発し、四時四十分ニ蘭の国境「クロセンタウン」（Roosendaal のこと——筆者注）ニ達ス、蘭国ヨリノ接伴トシテ、元日本公使「フロスブロク」（ポルスブルック——筆者注）氏、元日本領事館「ハンデル、タック」（フアン・デル・タック——筆者注）氏、此マテ出迎ヘ、駅舎ニ於テ款接（かんせつ）ス、両国ノ鉄路ハ、軌ヲ相接ス、国境ニテ軌ヲカヘルノ煩（わづら）ヒナシ、旅客ハ駅舎ニテ、税吏ヨリ荷物ヲ改メ抽税シ、査駅了（おわ）リ即チ発車スルナリ

アントウェルペンを立った一行は、ローゼンダール（Roosendaal——ベルギー国境の北七キロに位置する町）に

駐日公使時代のポルスブルック

着いたとき、オランダ側の接待委員ポルスブルック[2]とファン・デル・タック[3]らの出迎えを受けた。この出迎えのことは現地の新聞に出ている。たとえば『新ロッテルダム新聞』(Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・二・二五)は、次のように報じている。

二月二十四日　ロッテルダム

オランダ政府の名においてローゼンダールで歓迎を受けた日本使節は、オランダ鉄道によってハーグに向い、今夕七時半頃ベルギーより当地に到着した。

また『アムステルダム新聞』(Amsterdamsche Courant 一八七三・二・二五)の記事は次のようなものである。

二月二十四日　ハーグ

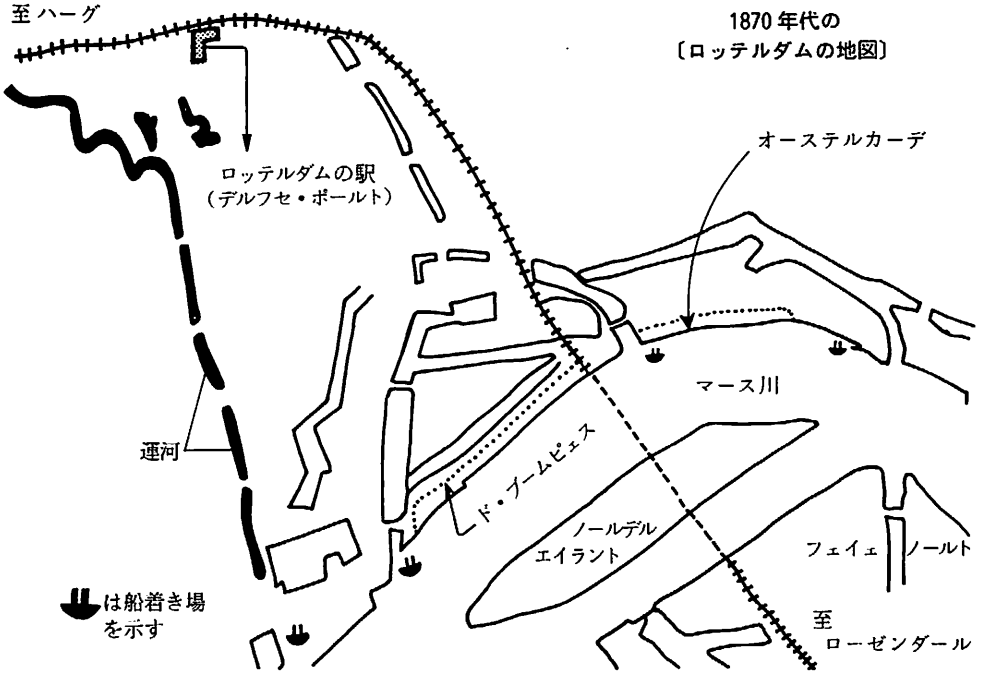
本日、日本使節が到着した。以前駐日オランダ公使であったグラーフ・ポルスブルックと元駐日領事タック氏は、日本使節を出迎えるためにローゼンダールに赴いた。

やがて一行を乗せた汽車はローゼンダールを発したが、オランダとベルギーの国境あたりでは数マイルにも及ぶ松林を見、それを過ぎると畑やみぞなどを見た。農家の屋根は麦わらで葺かれていて、壁はレンガで出来ていた。村をとり囲いているのは樹木であり、オランダ名物の風車も見られ、水を汲み上げていた。そのうちに汽車は河幅が千二百メートルもある「メーセ川」(Maas 川のことか?) の鉄橋を渡り、しばらく進むとまた川があってそれを渡った。やがて汽車は「レルェチ」[4] (不詳) の河岸に達したが、そこで鉄道は終っており、一行はここで下車し、川船に乗り換え、ロッテルダムに向った。その様子については次のように記している。

「レルェチ」ノ河岸ニ達シ、鉄道尽ク、此駅ニテ車ヲ下リ、渡航ニ上リ、河ヲ済リテ、鹿特坦府ノ岸ニ達ス、此河岸ノ馬頭(埠頭の意——筆者注)ヨリ、府中ヲスキテ、蒸気車駅ニ至ルマテハ、馬車ニテ接渡シ、鹿特坦ノ市街ハ、河渠交錯し、市廛(市中の商店の意——筆者注)ハ水(運河の意か——筆者注)挟ミテ建ツ、我東京ノ深川ニ彷彿タリ(詳カナルハ後ニ記ス)

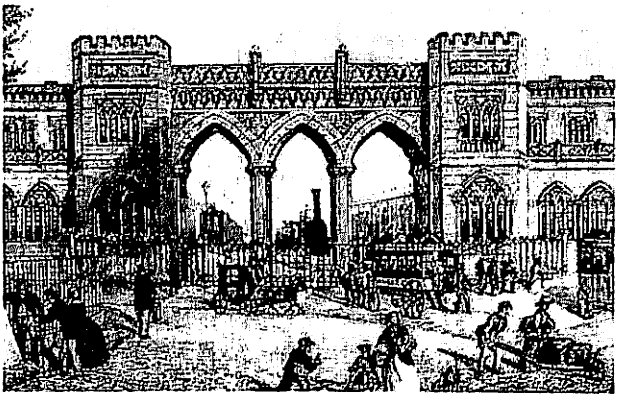
(『特命全権大使米欧回覧実記』以下『米欧回覧実記』と略記する。)

一行はマース河岸の波止場で下船した後、馬車に分乗し、ロッテルダムの中央駅(別名デルフセ・ポールト Delftsche Poort) に向い、そこからオランダ鉄道 (Hollandsche Spoorweg) でハーグに赴いた。埠頭から同駅に向う途中、市のたたずまいを熟視したと想像されるが、ロッテルダムの第一印象は、運河の多いことであったと思われる。その後の動静については、——


至ハーグ
1870年代の
〔ロッテルダムの地図〕
オーステルカーデ
ロッテルダムの駅
（デルフセ・ポールト）
マース川
運河
ド・ブームピェス
ノールデル
エイラント
フェイェ
ノールト
は船着き場
を示す
至
ローゼンダール

是ヨリ再ヒ蒸気車ニ上リ、八時三十分ニ、海牙府ノ「ホテルフーレー」ニ宿ス、旅館ハ政府ヨリ供シ、食飲ノミヲ使節ニテ弁セシム

（『米欧回覧実記』）



1860年代のデルフセ・ポールト（筆者収蔵）

とある。

一行はハーグの「オランダ鉄道駅」(Station Hollandsche Spoorweg)に到着後、日本人（名前不詳）の出迎えを受け、しばらく休息したのち馬車に分乗し、「オテル・ポーレ」(Hôtel Paulez)に向い、オランダ滞在中、ここを旅宿とした。このホテルは、ハーグ市の中心部――コルテ・フォールハウト Korte Voorhout 街二番地（旧番地）、王立劇場の向い側に位置し、客室五十、主として英仏の旅行者のひいきを受けたが、現存しない。いずれにせよ当時の一流ホテルであった。[5] この日の空模様は雪であったから、旅装を解いた後、暖かな暖炉のそばでほっと一息ついたものにちがいない。

翌二十五日も雪がふった。「雪猶ヤマス」[6]とある。ハーグ市の情景と特徴については、――

海牙府ハ、或ハ呼ンテ「ヘッグ」ト云、蘭国ノ京師（国王の住んでいる所の意

――筆者注）ニテ、国王此ニ居住ス、其地北緯五十二度四分二十秒、東経四度一六分ニ位シ、人口九万〇三百七十七人アリ、府中（国府の意――筆者注）ハ処処ニ滞渠（運河の意――筆者注）ヲ回シ、水滸トシテ渠ニ満チ樹木鬱蔥トシテ岸ヲ匝リ、闌人ハ潔癖ナルヲ以テ、樹ニ廃枝ナク、水ニ塵芥ナク、街路ミナ一塵ニ汚レス、気象（性質の意――筆者注）自ラ清潔ナリ、府中ニ車馬ノ馳行甚タ少シ、終日喧囂ノ声（口やかましく騒ぐ意――筆者注）ヲキカス、其家屋ニハ恢闊ニ窓眼ヲ開キ、全屋ミナ窓ナリ、壁ハ瓰瓦ニテ築ク、石造屋少ケレトモ、美麗ノ館第（邸宅の意か――筆者注）頗ル多シ、其建築ノ法ハ、自ラ英仏両国ニ異ナリ、新約克（不詳――筆者）ノ市街ヲ回想スルニ、其光景自ラ相肖タルモノアリ、彼地ハ会テ闌人ノ開ク所ナレハ、其遺風ヲ猶在セル歟、市街ヲ開ク法モ、亦仏国ニ異ナリ、街路錯雑ナル処ハ、其幅僅ニ両車互ニ馳スルニ足ルノミ、衝頭（大通りの意か――筆者注）処処ニ広域ヲ存シ、石像銅像ヲ環立シ、植ルニ緑樹ヲ以テス、其広街ハ、樹茂シ沙潔ヨク、一ノ長苑ヲナス、闌国ニ樹少シ、甚タ樹ヲ愛惜ス、老幹槎牙（古い木がごつごつしている意――筆者注）タルモノ多シ

（『米欧回覧実記』）

とある。

これによると当時のハーグの人口は約九万人。運河が市を取りまいており、河岸には樹木が多かったことがわかる。現在は埋め立てられた運河も多く、樹木も少ない。当時のハーグは馬車の往来は少く、清潔で静かな街であったようだ。オランダ人が木を大切にするのは、国土は低く、山地が無いからであろう。

使節は、オランダに入国する前に、謁見を乞う旨の書簡と国書の写しをあらかじめオランダ外務省の方へ送っておいたが、程なく、謁見がかなうとの連絡を宮内大臣より届いた。

この日の午後三時ごろ、宮内庁差し回しの馬車と護衛の騎兵隊がオテル・ポーレまで使節らを迎えに来た。使節と随行する書記官は次のように馬車に分乗した。

第一車……ポルスブルック・田辺太一。
第二車……伊藤博文・山口尚芳。
第三車……木戸孝允・大久保利通。
第四車……岩倉具視・式部次官（スハウブルフ）。
第五車……栗本貞次郎・安藤忠経・タック。

一行は馬車の前後を騎兵隊に護られながら王宮に向い、やがてそこに着くと、近衛兵一大隊が左右に整列しており、日本使節を《奏楽捧銃礼》をもって迎えた。式部長官が出迎え、一同をまず外務大臣に会わせた。そのあと正殿に進んだ。殿中央には国王ウィレム三世が立っており、侍従らその他の朝臣らも侍立していた。

岩倉大使が、

「我天皇大業を中興し（統治権を取りもどした意――筆者注）政治を一新せられ夙に外交の重きを察し、特に我曹（われわれの意――筆者注）を結盟各国に派出せられ今辱く陛下の引接を得、恭く我天皇の手書（手翰の意――筆者注）を奉すること実に我曹無上の栄なり。我天皇の志すところは、載て書中にあるかことく勉て友誼を厚くし、永世渝ることなからんを顕すにあり。殊に貴国の我国に於る其信を通する事既に三百年の久におよひ学問術芸貴国に資りて我益を稗くること尠からす。我曹陛下に咫尺するの期を以て面たり（近くで拝謁する機会に恵まれたの意――筆者注）、其実を上陳する事、我曹の悦に堪さる処にして、亦恐くは陛下の聞くことを喜ひ玉ふ処なるへし。我曹又此会を以て陛下の寿（長生きの意――筆者注）、且貴国の平安を祈る」

と日本語で挨拶すると、ポルスブルックがこれをオランダ語に訳した。これに対するウィレム三世の答詞は次のよう

なものであった。

「朕深く日本皇帝陛下の厚礼丁寧を感銘し、使節貴所（貴下の意か――筆者注）等を待つこと歓喜斜ならす。貴国と荷蘭国との交際こゝに年久しく親睦なるは、朕常に喜ぶ所にして其交の睦しきより、貴国の術芸にも益ある条、朕実に欣慰に堪へす。尚更に爾今（これからの意――筆者注）両国の間愈旧友の誼厚からんこと疑なかるへし。朕今其皇帝陛下の政府盛美不変大平永久と陛下の幸福とを祈る」。

これらの言葉は、ボルスブルックが口述したものであったが、実際訳したのはライデン大学のホフマン博士であった。(7)

謁見式がおわると、岩倉は三拝して退き、国王の侍従らにも一礼して退室した。玄関まで式部長官が一行を見送った。

謁見当日の模様について『米欧回覧実記』は次のようにいう。

四時ニ宮内省ヨリ乗車ヲ装ヒ、騎兵ヲ護衛トシテ、宮内ノ長官来り迎へ、王宮ニ至リ維廉第三世陛下ニ謁見ス（謁見式ニ見ユ）、海牙ノ王宮ハ、市中ニアリ、規模偏小（狭くて小さい意――筆者注）ニテ、建築モ宏壮ナラス、其造構ニハ、一種ノ形式ヲ用ヒ、英仏諸国ノ王宮ト異ナリ

なお、前日（二十四日）とこの日の日本使節の動向については、『新ロッテルダム新聞』(Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・二・二六）がくわしく報じている。

二月二十五日　ハーグ

すでにヨーロッパ各国を歴訪した日本使節は、昨日来当地にいる。昨日の午後三時に、使節一行のうちの何人か――使用人らは当ハーグに到着し、「オテル・ポーレ」に投宿した。すでに当地にいる書記官のうち二名は、昨晩八時にオランダ鉄道の駅に向った。そこで更に使節の面々――大使および高官らを迎えるためである。

使節一行は八時二十分の汽車で当地に到着したが、以前駐日弁理公使であったグラーフ・ファン・ポルスブルック氏と元駐日オランダ領事ファン・デル・タック氏らが随従していた。両氏ともローゼンダールまで使節を出迎えに赴き、オランダ領のその地で使節一行にあいさつをした。

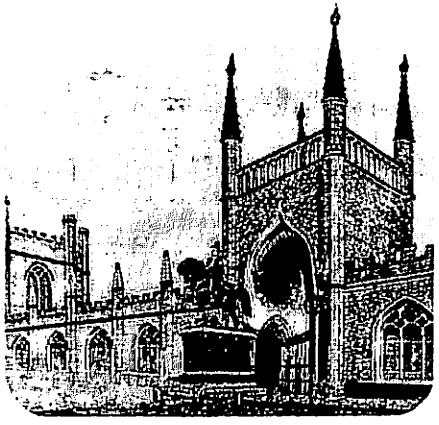
駅の待合室ですこし休息したのち、身分の高い訪問者らは、準備のととのった馬車に乗り「オテル・ポーレ」に行った。使節一行のほとんどの者が英語を識っており、全員がヨーロッパ風の装いである。駅とホテルには好奇心に富んだ人々の姿がみられた。

今日の午後十二時半に、使節の首席五名は外務省で大臣の引見をうけた。かれらを紹介したのは駐日公使であったポルスブルック氏である。

今日の午後三時ごろ、近侍で式部官のスヌケルト・ファン・スハウブルフ男爵は、六頭立ての盛装した馬車に乗り、その他の宮廷の馬車を伴ない、先導して「オテル・ポーレ」に赴いた。それはそこにいる日本使節の面々を迎え、国王陛下の引見を受けさせに王宮まで案内するためである。次いで今、ヨーロッパ風に正装した（金で刺しゅうしたフロックコート、三角帽、剣などで）身分の高い人たちは、用意された馬車に乗った。

先頭の馬車には、わが帝室のもと弁理公使グラーフ・ファン・ポルスブルック氏が乗り、一方、使節の首席である岩倉大使は正装した馬車に乗った。随員たちは堂々と着座すると、馬車は軽騎兵の一隊の先導と護衛をうけて、王宮へ向けて動き出した。道筋はフォールハウト、クネンテルディク、ヘウルストラーチェなどであった。

王宮に到着すると、そこには近衛連隊の儀仗兵と猟騎兵らが整列していた。かれらは使節一行がそばを通りすぎるとき、栄誉礼をもって迎えた。一方、喇叭（ラッパ）手はパレード・マーチを吹いた。



ハーグの王宮（『米欧回覧実記』より）

国王は正装した朝臣、侍従、さらに宮廷の面々、外務大臣らの目の前で、使節を引見した。使節はグラーフ・ファン・ポルスブルックのとりなしで国王の拝謁を賜ったのである。

謁見がすむと、各使節は再び自分たちのために充用されている馬車に乗り、来たときと同じ順序で「オテル・ポーレ」まで送り届けられた。

はげしい俄雨にもかかわらず、高貴なる外国人を近くで見ようと、おびただしい人々が出ていた。かれらは服装と外観からだとヨーロッパ人と少しも違わないが、ある点で以前やって来た使節[8]とだいぶ異なる。前回の使節は風変りな和服で現われた。

今日の夜九時に、外務大臣邸で外交的な大レセプションが催され、そこへ日本使節らも出席することであろう。

私たちの市民、ポンペ・ファン・メールデルフォールト医師は、使節がハーグに滞在する間、主治医を勤めることであろう。

同夜、外務大臣邸で催されたレセプションについては、『米欧回覧実記』に、

○夜外務宰相巴倫（パロン）〈爵名〉「ヘリーキテ、ヘルウェイネン」氏の邸宅ニテ「ソワレイ」ノ享会アリ

とある。

また二十六日付の『ライデン新聞』(Leidsche Courant) の「最近の情報」Laatste Berichten という欄には、次

のような記事がみられる。

二月二十五日　ハーグ（電報による）

今日の三時半に宮廷のお召し馬車が「オテル・ポーレ」まで日本使節を迎えに行き、王宮まで騎兵一分隊が案内した。王宮では、王室の面々や外務大臣が居並ぶ面前で国王の儀礼的な引見を受けた。王宮には儀仗兵が整列していた。

さらに日本使節団の構成や同日の夜会、ポンペが主治医となったことについて、次のように伝えている。

日本使節は次の面々から成り立っている。――岩倉・木戸・大久保・Otto（不詳）・山口・Tanbo（田辺のことか――筆者注）・Jah（何のことか、不詳）・田中・富田・栗本・Looguura（不詳）・安藤・パーソン。後者はまた通訳でもある。
今日の午後十二時半に、使節の主席五名は外務省に大臣を訪ねた。かれらはグラーフ・ファン・ポルスブルックによって紹介された。今晩九時に外務大臣邸において外交的な大レセプションが催されるが、それに日本使節は出席することであろう。
私たちの市民、ポンペ・ファン・メールデルフォールト医師は、使節がハーグに滞在する間、主治医を勤めることであろう。

二十六日、前日まで降っていた雪は雨に変わり、夕方には晴れた。明け方より寒気はだいぶゆるんだが、それでも寒いことに変わりない。この日、使節一行は汽車でロッテルダムへ向かった。市内のフェイェノールト（Feijenoord）にあるオランダ蒸気船会社（Ned. Stoomboot Maatschappij）の工場や造船所を見学するためである。一行には新

ロッテルダムの運河（『米欧回覧実記』より）

たに駐日公使に任命されたフォン・ウェックヘリムと元駐日領事のファン・デル・タックらが付き添いとして同行した。午前九時にホテルを出て汽車に乗ったが、ロッテルダムに向う途中、車窓よりオランダの風土の特徴に目を向ける。

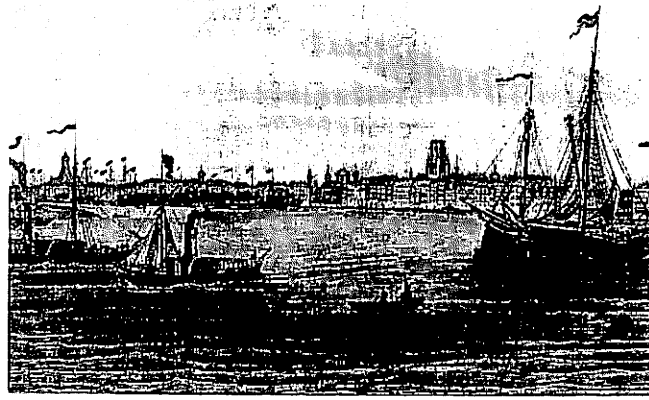
二十六日　朝雨夕ニ晴

暁来寒気頓ニ減ス、九時ヨリ旅館ヲ発シ、蒸気車ニテ鹿特坦府ニ赴く、途上ミナ塗泥ノ田地ニテ、溝渠縦横ナリ、村落処処ニアリ、風車閃閃（ひらめき動くさまの意―筆者注）トシテ、林樹ノ上ニ抽テ、水道ハ堤上ヲ流レ去ル、闔国ノ平地ハ、水面ヨリ低シトハ此等ヲ謂フナリ、鋭路ハ地上ヲ築上クルコト三尺有余ニテ、沙ヲ撒ジ、地ヲ窒固（しっかり固める意――筆者注）シ、修繕甚タ手ヲ尽セリ

（『米欧回覧実記』）

水面より低いオランダ、水路・河川の水があふれれば〝水郷〟ともなり、また風車が動かなくなれば国内は水害をこうむると前掲書にあり、このような地勢から使節一行は、日本の銚子や新潟の河口、佐賀、熊本などの海岸の低湿地帯などを想い起しているのである。

やがてロッテルダムの停車場に着いた一行は、オランダ蒸気船会社の重役らの出迎えを受けたのち、そこから



1860年代のロッテルダム港（筆者収蔵）

〝東の埠頭〟Oosterkade か、〝ド・ブームピエス〟De Boempjes（文久遣外使節らはここから船に乗り、対岸へ渡った）に向ったものか。ここからは対岸のフェイエノールトに渡るのに最短距離である。いずれにせよ《此日ハ、其河岸ニ蒸気船ヲ艤シ、我紅日の章ヲ飜シテ待ツ、是ヨリ上船シテ河ヲ下リ、一英里許ニテ、造船所ニ赴ク》とあるから、日の丸の旗がへんぽんと翻った汽船が岸につながれており、それに一同乗って対岸の造船所へ向ったということであろう。

ロッテルダムのデルフセ・ポールト（駅）から馬車で波止場へ向う途中、同市の町並みや景観を観察する間はあったことと想像されるが、それらについては次のようにスケッチしている。

鹿特坦府ハ、北緯五十一度五十五分、東経四度二十九分ニ位シ、人口十一万六千二百三十二人アリ、荷蘭ニ於テ第二ノ都会ナリ、屋宇（家屋の意――筆者注）ノ建築ニ奇観ナシ、幅ハ三四窓ヲ存シ、五六層、赭瓦ヲ以テ、狭長ニ築キ並ヘ、毎街ノ屋（すまいの意――筆者注）、ミナ溝渠ノ水ニ鑑ミ（どの家も運河に影をおとしているの意――筆者注）、巍然トシテ仄ツ（そびえたつ意――筆者注）、大度壮屋（大きな家屋の意――筆者注）少シ、溝渠ノ岸ニハ、樹ヲ植エテ街路ヲ界シ、車行少ク、歩行多ク、河道（運河の意――筆者注）交

錯シ、漕舟ヲ以テ重車（重い物をのせた車の意――筆者注）ニカユル、故ニ河ニ架スルノ橋ハ、其中腹ニ蝶活ヲ施シ、上ニ楨桿（てこの原理を応用した装置の意――筆者注）ヲ植エ、船来レハ開キ、船去レハ閉ルノ便ヲナス、処処ニ風車ヲ設ケテ、水ヲ引キ落ス、○此府ハ「レメーセ」河ノ支流ニ控ヘテ、貨物吐呑ノ口タリ、（中略）此河ノ広サ五六百「フイート」、橋礎ヲ植エテ、鉄道ヲ架成セントスルヲ見ル、是ヨリ市廛（市中の商店の意――筆者）尽キレハ、老樹蔚然トシテ、平坦ナル道ヲ挾ミ、長塢（長い土手の意――筆者注）ノ河岸ニ連リタル処ヲ駛行（走っているの意――筆者注）ス

（『米欧回覧実記』）

一行はロッテルダムでオランダ風の家屋、市街の運河、跳ね橋、マース川に架かる工事中の鉄橋などに注意を惹かれたのであろう。

フェイエノールトにある「オランダ蒸気船会社」は、旧幕時代に幕府海軍の軍艦「開陽丸」を設計した所でもあり、日本とはなにかと縁の深い会社でもある。使節団はまず造船所から見学したようであるが、それについては詳しい見聞報告をなしている。

○「マーシバッペー」会社ノ造船場ハ、職人ヲ入ル日ニ一千人ナリ、造船ノ都合ニヨリ、増シテ一千五百人ニ至ルコトアリ、定員ナシ、基給金ハ、日ニ四「ギュルデン」ヨリ、二「ギュルデン」半ニ至ル（十二「ギュルデン」ヲ以テ英ノ二十「シルリン」（シリング――筆者注）即チ一磅ニカユ、我三十七銭半ニテ一「ギュルデン」ナリ）、場内ニ、外国ノ人ヲ用フルコトナシ、是ハ其抗議ヲ生シ、沸騰ヲ生シ易キヲ以テナリト云、蓋シ欧州列国、各公法ニ依リ、礼儀ヲ守リテ、交際スルカ如シト雖トモ、内実ヲ察スレハ、強弱相凌キ、其自主ノ権ヲ全クスルヲ得サルコト、比比（しばしばの意――筆者注）コレアリ、況ヤ人民ノ相交ル、細故（ごくわずかな事がらの意――筆者注）ニ於テワ、大国ノ民ハ自ラ強傲ニシテ、小国ヲ睥睨（横目でにらむの意――

筆者注）スルヲ免カレス（後略）

『米欧回覧実記』

これによると、当時この汽船会社には千から千五百人ほどの職人が出入りしており、日当は二フルデン半から四フルデンであったことがわかる。また外国人の労働者は、面倒をひき起されたくないので雇い入れられなかったようだ。これに続く文章は、造船と操艦に欠かせない鉄・材木・石炭等は、輸入に頼っていることを伝える記述である。

《○蘭国ニ鉄ヲ生セス、鉄ハ英国、白耳義ヨリ輸入ス、独逸ヨリモ仕入レトモ、其質柔ニシテ劣レリ、瑞典国ヨリ来ル鉄ハ、最モ上品タリ、故ニ装飾ニ用フルノミ、蘭国ニ又材木乏シ、国産ニテ需用ニ足ラス、那威国ヨリ仕入レ、亜米利加ヨリ仕入ル、ミナ良材ニハ非ス、印度地方ヨリ来ルモノヲ以テ最良トス、其質ノ堅密ナルヲ以テナリ》

《蘭国ノ船ヲ製スルヤ、其材ミナ他国ノ産ヲ仰ク、而テ其船舶ノ多キト、海外ニ航跡ノ交ルトハ、米英ニツヽク、漕運貿易ノ利ハ、豈ニ天然ニ与奪アランヤ、只人ノ勤惰（つとめはげむの意――筆者注）イカンニアルノミ、蘭国ニ又石炭ヲ生セス、コレヲ英白（イギリス・ベルギーの意――筆者注）ノ両国ヨリ仕入ル》（前掲書）

造船所内にすえられていた工作機械は圧搾機・旋盤などであり、汽罐（蒸気ボイラー）のびょう打ではプレッサーを用いず、職人の手仕事であったといい、製材所には蒸気を用いたろくろ台・穿孔盤などが備えられており、また建造中の船二隻もすべて見学した。

《故ニ場内ニ蒸気ノ輪ヲ設クル、甚タ少シ、只四箇アルノミ、合セテ七十五馬力ニスキス、以テ鉄版ヲ曲ケ、孔ヲ鑿開（切り

開くの意――筆者注）、之ヲ鋸シ（切るの意――筆者注）、之ヲ鉋シ（そぎとるの意――筆者注）、凡ソ多人ノ力ヲ要スル、大工作ノ用ニ供ス、「プレッヂン、マシイネ」（圧搾機の意――筆者注）「プレール、マシイネ」（不詳）等ヲ設ケタリ》

《○場内ニ人力ヲ用ヒテ工ヲナスコト甚タ多シ、蒸気ノ鑵ヲ緊釘スルモ、「プレッヂンマシイネ」ノ力ヲカラス、職人釘装スル鑵前ニ立チ、鉄鎚ヲ地ニ堅植シ、鑵ヲ其上ニ横ヘ、一少年ヲシテ、釘ヲ紅烙（真赤に焼いたの意――筆者注）シ持来リ、倒ニシテ鑵下ヨリ孔ニ挾ミ、緊ク之ヲ拉持（たたく意か？――筆者注）スレハ、其釘末ハ上ニ向ヒ抽ルヲ、二人ニテ連槌ス、其他ノ諸工事、ミナ人力ニテナスコト甚タ多シ（後略）》

《木製所ハ、場舎ノ上層ニアリ、蒸気ノ余力ヲ分ツテ、轆轤、線鋸、輪鋸、錐鑿ヲ運ス、又歯輪ノ歯ヲ斬成（けずる意か――筆者注）スル器アリ、其他ハ人工ニテナスモノ多シ》

《○造船廠ニ於テハ、当時打立中ノ船ニアリ、爪哇国政府ヨリ、四艘ノ船ヲ嘱セラレテ製造ス、其二艘ハ奄特坦府ニテ打立テ、二艘ヲ此府（ロッテルダムの意――筆者注）打立ル、去年五月ヨリ工ヲ施シ、来年三月ニ至リテ成就スヘシ、其価三万磅、船ノ大サハ艫ヨリ舳（船尾の意――筆者注）マテ、三十余間ノ船ニテ、其一艘ハ已ニ九分ノ成就トナレリ》

それより一行は鋳物工場（造船所内にあったものか）を見学したが、場内には、オランダ文で

「日本使節歓迎」

といった意味の文字が灰土に印型されていて、使節団が入場すると、まっ赤な熔鉄が流し込まれた。

このとき職人たちはみないっせいに脱帽し祝声をあげた。

《夫ヨリ鋳物ノ場ニ至ル、此場舎ノ設ケハ、頗ル大ナリ、此場内ニテ、地上ニ日本使節幸ニ来ルノ文字ヲ、灰土ニ印型シオキ、我一行ノ場ニイル後、熔鉄ヲ流シ込ミタレハ、紅字ヲ灰土ノ内ニ露シテ、炎ヲ吐ケリ、職人ミナ一斉ニ帽ヲ執リテ、祝声ヲ揚タリ》

これで造船所内のめぼしい施設をすべて見学しおえたわけだが、それより一行は、マース川に係留されているイギリスの郵便船（mailboat）で昼食をとり、バタビア産の砂糖漬などを食べた。昼食のあと、午後三時十分の汽車でハーグに戻り、四時半にホテルに帰った。

《是ヨリ英国ノ郵船ニ上リ、昼食ヲ享シ、「スピーチ」アリ、爪哇産ノ沙糖漬ヲ供セリ、此港（ロッテルダム港の意――筆者注）ヨリ英ノ倫敦へ、郵船月ニ三四発ス、航程百八十英里、二十分時ニテ達スヘシ、上等ノ船賃ハ三弗、中ハ六「ギュルデン」、即チ英ノ半磅ナリト云、三時十五分ニ蒸気車ニ上リテ、四時半ニ帰館ス》

日本使節がロッテルダムを訪れることは早くから知られており、『新ロッテルダム新聞』（Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・二・二五）は次のように報じている。

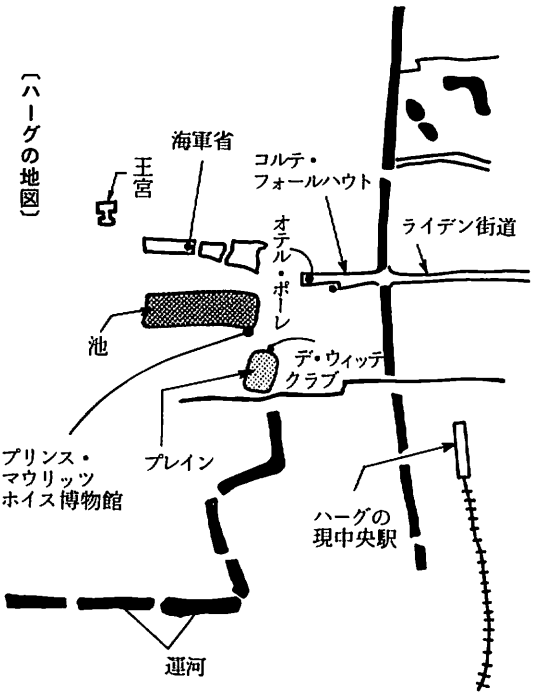
二月二十四日　ロッテルダム

伝えられるところによると、日本使節はこんどの水曜日にフェイェノールトの「オランダ蒸気船会社」の施設を訪問するということである。そこにある蒸気機械の工場や造船所を視察するためである。

二十五日の外務大臣邸での夜会と使節らのロッテルダム訪問については、『ライデン新聞』（Leidsche Courant 一八七三・二・二七）に次のような記事が見られる。

二月二十六日　ハーグ

昨日、外務大臣が主催した夜会に日本使節らも出席し、何人かの招待客はかれらに紹介された。出席者の中には、わが帝室とその他の国の政府代表らの姿も見かけられた。グラーフ・ファン・ポルスブルックとファン・デル・タック両氏は、このレセプションにおいて日本使節に付き添っていた。



〔ハーグの地図〕

九時二十分の汽車で、今朝日本使節はロッテルダムに向った。使節はロッテルダムで「オランダ蒸気船会社」の重役らに迎えられたが、この外国の訪問者にフェイエノールトにある工場や造船所を見学させる機会をあたえるためである。

新たに任命された駐日公使フォン・ウェッケリン氏と領事ファン・デル・タック氏が使節に付き添っていた。使節一行は今日の四時すぎに当地にもどる。

二十七日は晴天。この日、使節は、午前中、各国外交団の面々、砲兵隊の佐官、教育監督官、および政府役人らと会い、それよりグラーフ・ファン・ポルスブルック氏の案内で、各省と「海軍省」(Departement van Marine) を訪れた。海軍省はランヘ・フォールハウトLange Voorhout

（公園）に位置し、旅宿からも近い。海軍省では各艦船や灯台の模型、各種の武器などを見学した。

二十七日　晴

午後ニ海軍所ニ至ル、旅館ノ前ナル、苑域（公園の意――筆者注）の向ヒニアリ、蘭国ノ昔時共和政治ナリシ比ハ、海軍ノ盛ナルコト、欧洲ニ超駕シ、屢英国及ヒ西班牙ヲ破リ、積年驍足ヲ海外ニ展タリ（勢力を伸ばしたの意か――筆者注）、其有名ノ歴史アル、英国「テームス」河ノ戦ニ分捕セル、英艦ノ器械「及ヒ船艦ノ雛形（模型の意――筆者注）モ多ク此ニ蔵セリ、其他燈台ノ雛形、大砲、小砲、剣、旗、分捕ノ海軍兵仗（武器の意――筆者注）ナドノ類ヲ、五六室ニ蓄フ

（『米欧回覧実記』）

当時のオランダ海軍の艦船数と備砲等については《軍艦ノ数六十七艘、此内ニ甲鉄艦十六艘、其六ハ四百馬力ノモノニテ、其十ハ百四十馬力ノモノナリ、之ニ備フ大砲五十四門アリ、其外ハ種種ノ軍艦ニテ、六百馬力ヲ首トシテ、二百五十馬力ニ至ル、之ニ備フ大砲三百八十門、注進船（報知艦の意――筆者注）、及ヒ運送船ハ、此数外ニアリ》とある。

海軍省内の陳列室を一覧した一行は、それよりハーグの森（Het Haagsche Bosch）の中にある女王の別邸「森の家」（Huis ten Bosch）を見学した。

ハーグの森については、――

○旅館（オテル・ポーレのこと――筆者注）ノ東ニ樹苑アリ、之ヲ「ハーヘ」ノ森ト云、老樹深鬱トシテ、甚タ幽邃（奥深く

1860年代のハーグの森（筆者収蔵）

てもの静かな意――筆者注）、地勢少シク起伏シテ、山中ノ意象（感じの意――筆者注）アリ、縦横ニ道路ヲ通シ、廃葉地ヲ埋メ、風声爽然（さわやかで快いの意――筆者注）ナリ、此苑中ヲ全ク徘徊スルニハ、八時間ノ歩行ヲ費シ、始メテ全局（全体の意――筆者注）ヲ回り了ルト云

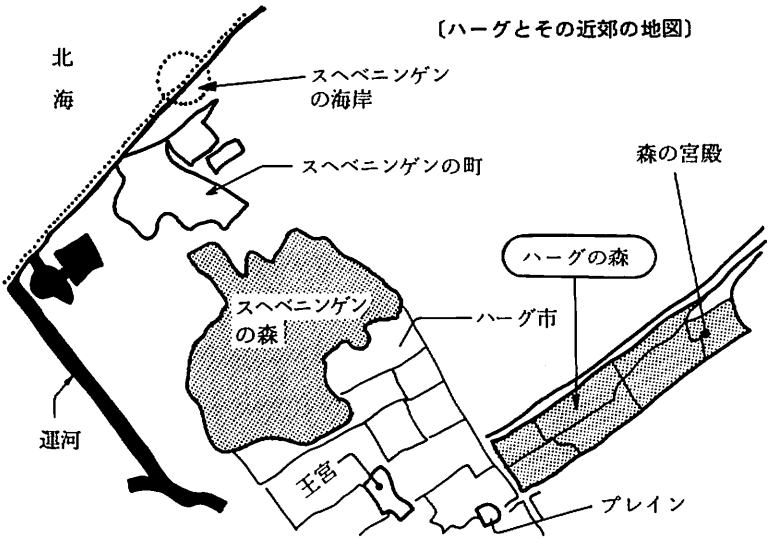
とある。

ハーグの森は長さが約三キロもある公園で、園内にはレストランもある。女王の別邸「森の家」は別名「森の宮殿」(Paleis in't Bosch) ともいい、森の北東に位置している。建物は十七世紀に、ピィテル・ボストによって、フレデリック・アンリ・ファン・オラニエ公の配偶者――アマリア・ファン・ソルムス妃のために造られたものである。[9] この別荘は、一八九九年に最初の世界平和会議が開かれた所として知られている。

「森の家」については――、

此森ノ西北ニ王宮アリ、「クインパレイス」ト名ク、宮（御殿の意――筆者注）ノ建築ハ、甚タ壮大ナラサレトモ、森樹ノ風籟刁刁（風がそよぐの意か――筆者注）トシテ、常ニ爽気ヲ送リ、内景ノ粧飾モ、亦清楚ヲ主トシテ、雕飾（彫刻して飾るの意――筆者注）ヲ絶ス（後略）

〔ハーグとその近郊の地図〕



とある。

屋内に入ると、食堂にはグリザイユ（灰色一色の絵画）があり、支那・マイセン・デルフトの磁器などが飾られている。「支那の間」には十八世紀のつづれ織りが、「日本間」には一七九五年に日本政府（幕府）より献上された鳥や植物を描いた刺しゅう品などが見られ、二階には各種の絵画（肖像画など）がかけてある。(10)

○一房（へやの意――筆者注）ノ内ニハ、東洋ノ物品ヲ以テ、室内ニ羅列セリ、日本産ノ名器モ数品アリ、ミナ精良ニテ価アル品タリ、当国ハ日本ト交通独リ久ケレハ、積年貿易セル佳品中ヨリ、殊ニ精選シテ、王家ノ什物（日用のうつわ類――筆者注）トナシタルニヨリ、此ニ入レハ、日本ノ工産モ、亦一層の色ヲ生スルヲ覚フナリ、正寝（国王の居所の意――筆者注）ニハ数幅ノ油絵アリ、其大サハ壁ヲ専ラニス、名工筆ヲ逞クシ、仰視俯覧（仰き見るの意か――筆者注）、終日観ルモ倦マス、楼上ニモ名画ヲ多ク蓄フ、今ノ皇后、夏日ニ至レハ、此ニ来リテ暑ヲ避ルトナリ

（『米欧回覧実記』）

この日の日本使節らの行動は、各紙にも報じられた。たとえば、

『新ロッテルダム新聞』(Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・二・二八) は、――

二月二十七日　ハーグ

聞くところによると、日本使節はファン・オラニエ公、フレデリック公、およびヘンドリック公らの謁見を賜うことを願ったということである。

日本使節は本日、各省と外交団を訪れた。かれらはポルスブルック氏の案内で、「海軍省」の陳列室を見学し、大きな満足を示した。その後、使節はハーグの森へ行き、女王の別邸「森の家」を見学した。

と伝えているし、『ライデン新聞』(Leidsche Courant 一八七三・二・二八) は、次のような記事を与えている。

二月二十七日　ハーグ

日本使節の首席らは、今日の午前中に「オテル・ポーレ」で引見し、外交団の面々、砲兵隊の何人かの佐官級将校、初等教育の監督官、また政府役人、当局者らが謁見を賜った。

また変った記事では、使節団のメンバーについて紹介したものがある。『スキーダム新聞』(Schiedamsche Courant 一八七三・二・二七) の次の記事がそれである。

二月二十六日　スキーダム

日本使節は月曜日にハーグに到着した。以前オランダ駐日公使であったグラーフ・ポルスブルックと元駐日領事ファン・デル・タック氏らは、ローゼンダールまで使節を出迎いに赴いた。

使節の首席である岩倉氏は、日本の身分の高い家柄の出身である。昔は外務大臣であったが、今では右大臣といった重要な職務を果たしている。最も高位の日本官吏の序列は次のようになっている。すなわち、帝のすぐ次には首相、その次には副首相、そのうちの左大臣（これは帝の左側に立つ意）は右大臣（帝の右側に立つ）よりも身分が高い。うしろから二番目の地位（左大臣）はさしあたって空席となっている。

次いで参議四名がつづく。

その次にまず来るものは各省の首席、大臣や副大臣らである。

なお更に使節としては、参議の木戸、大蔵卿の大久保、もと大蔵卿で今は土木局（工部大輔）の伊藤氏らがいる。これらの人たちが高い地位についたのは、その精力と才能に負うところが大きい。かれらは帝の政治の最も熱心な支持者であり、帝が勝利を収めたのは一部かれらのおかげでもある。長い間ニューヨークやロンドンで暮らした伊藤は、大蔵卿として日本の貨幣制度を整え、アメリカを模範とした（一八七〇年）。

かれはこれまでに江戸にユトレヒトのものより四倍も大きな造幣所を造った。

更に使節の一員にはまた外務少輔の山口氏がいる。

第一秘書には、外務省の田辺・Gawa（不詳）・塩田らが、また大蔵省の Koetsi（不詳）がいる。

第二秘書には、栗本・Soegioera（不詳）・小松・林らがいる。

第三秘書には池田・安藤らがいる。

第一使節の特別秘書には久米がいる。

使節には次の面々が随従している。――会計委員の田中、大蔵省の川路と杉山、医師の Foekoei（不詳）、通訳としてウィリアムとパースンらが。

J. J. ホフマン博士

晩年のポンペ

すでに述べたごとく、使節の面々はわが国の最も重要な場所を訪れることであろう。

翌二十八日は快晴であった。この日、幕末に出島の医官として来日し、多くの日本人医学生に西洋医学を体系的にさずけ、わが国最初の洋式病院（長崎養生所）を造ったポンペ（一八二九――一九〇八）が案内役となって、使節一行をライデンに連れて行った。このころポンペは医師のままハーグ市の市会議員を勤め、かたわら「デ・ウィッテ・クラブ」[11]（紳士クラブ）の理事を兼ねていた。

ポンペは朝早い時間にオテル・ポーレを訪ねたと思われるが、もう一人、日本使節の世話役兼案内係として、ライデン大学の東洋学のホフマン博士も同ホテルを訪問し、使節一行に随行してライデンに向ったように思える。『木戸孝充日記』に「ホフマン（曾て本邦へ雇入れし人なり）の案内にてレーテンに至りミシュームを一見す」とあるからである。

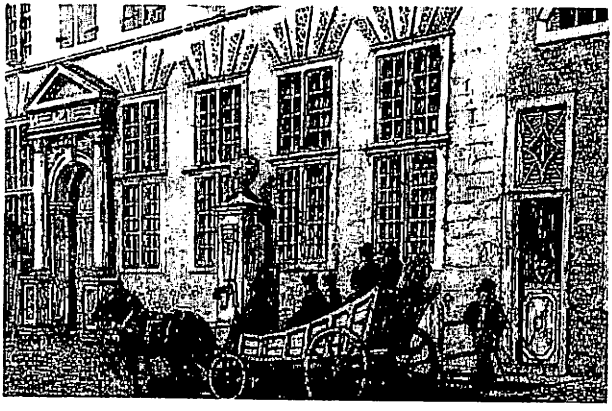
ともあれ一行は、ポンペ及びホフマン博士らの案内でホテル前より馬車に分乘し、ライデンに向った。道筋は「ライデン街道」(Straatweg naar Leiden) であったと思われる。これはコルテ・フォールハウトを出発点としてハーグの森を通り、ライデンに至る街道である。汽車を利用せず、わざわざ馬車で出かけたのは、途中の美しい田園風景を満喫させようといったオランダ側の配慮があったものであろう。一行は、街道の西側に老木の並木が続き、こだちの多い丘陵、清流、貴族の館、牧草地、牛羊の群、村落などを見ながら、一路ライデンの町へ向った。

二十八日　美晴

朝九時ヨリ「ドクトル、ポンペー」氏ノ案内ニテ、馬ニ駕シ（馬車に乘っての意――筆者注）、来丁府ニ趣ク、○「ポンペー」氏ハ曾テ我長崎ニ来リテ、医業ヲ人ニ授ケルコト八年、本朝医学ノ進ミニ於テ、頗ル力アル人ナリ、一千八百六十二年ニ帰国ス、当時年六十余、其健ナル壮士（意気の盛んな男の意――筆者注）ニ同シ、来丁ニユク馬車路ハ、「ハーヘ」ノ森ヨリ馳セテ東ニ赴ク、老樹森森（樹木が盛んに茂るの意――筆者注）トシテ、大路ヲ挾ミ、路ハ沙ヲ撒シ爽塏（快い意か――筆者注）ナリ、時ニ林丘ニアヒ、清流ニアフ、王族貴戚（身分の高い人の意――筆者注）ノ邸館アリテ、修繕甚タ潔ク、勝致（すぐれたおもむきの意――筆者注）多シ、是ヨリ沿途ノ田野モ、ヤヽ爽塏ニテ、水平ヲ抽ツル尺ニ過ク、牧草地ニ満チ、牛羊ノ群スルヲミル、頓落ハ処処ノ林薮（やぶの意――筆者注）ニ起リ、高塔ノ抽ツルヲミル、南北蘭ノ州州ニ於テ、爽土ニ属ス、十英里行ニテ来丁に達セリ

（『米欧回覧実記』）

一行はライデンへの途上、馬車から見る景色とは別に、行進中の砲兵隊の兵士らの姿を目撃した。その兵士らの服装や態度から、徹兵忌避の風潮がびまんしているのを感じ取り、かつ、怨嗟の声を聞く思いがしたようである。



1860年代のライデンの乗合馬車，建物はブレーストラートの市庁舎（筆者収蔵）

本日海牙ヨリ来丁ニ至ル途上ニ、砲兵数隊道ヲ過キルニアフ、其行軍ノ容儀、亦曩日（昔、以前の意――筆者注）白国ノ兵隊ニ似ス、蘭国ノ兵ハ、常備軍六万ニ及ハス、専ラ義兵（正義のために起こした軍隊の意――筆者注）ヲ主トシ、徴兵ハ二十歳ヨリ、五年間ノ役ニ服スル法ニテ、実ハ一年間繰練ノ後ハ、家ニ帰リ、四年ノ間ハ、年ニ六度ノ練兵ヲナスノミ、然レトモ全国ノ民丁（壮年の男子の意か――筆者注）、甚タ徴兵ヲ厭ヒ、兵ヲ逃ルヽモノ益多キヲ加ヘ、軍医ノ検査幣害百出シ、武官モ苦心ヲ極ムトナリ、民兵役ヲ逃ルヽ幣ハ、各国ミナアル通患ナレトモ、蘭国ノ甚シキカ如クナラス、故ニ兵隊ノ気炎モ、自委靡（衰え弱るの意――筆者注）シテ振ハサルヲ覚フ

（『米欧回覧実記』）

やがて一行を乗せた馬車は、ホーヘ・レインディク、ノールトエインデの通りを経てライデン市内に入ったものか。

ハーグの北東十八キロに位置する学都ライデンの当時の人口は、約三万九千人（現在は約十万）で、オランダ第五の都会であったという。この町の沿革と大学については、――

○此邑ハ蘭国ノ嫩魯（ライデンはオランダの誕生地の意か――筆者注）ナリ、古ヘ一千六百年代ニ、西班牙ノ兵、蘭国ニ侵入セシトキ、此地ノ兵勇コレヲ拒ミ、勇健ニシテ善ク戦ヒ、遂ニ寇ヲ卻ケタリ（侵入者を追っ払ったの意――筆者注）、政府其功ヲ

賞セシト欲シ、何ヲ以テスルヲ知ラス、欲スル所ヲ邑中ノ民ニ問フ、ミナ一ツ学校ヲ起コシテ、末世ニ恵セシコトヲ願フ、因テ其望ミニ随ヒテ、此ニ大学校（ライデン大学の意――筆者注）ヲ起セリ、其後文学盛ニ進ミ、有名ノ博士ヲ出スコト、今ニ陸続トシテ名誉を墜サス

（『米欧回覧実記』）

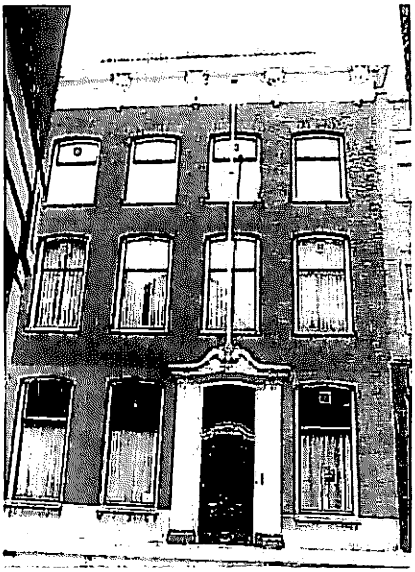
とある。

市内に入り、まず目に入って来たものは――運河沿いの家並み、瓦を敷きつめた街路と並木――静寂な町そのものであった。

府中ノ街路ハ、広豁（広く大きいの意――筆者注）ナラサレトモ、修刷（掃き清める意か――筆者注）甚タ潔シ、大街（大通りの意か――筆者注）ハ溝渠ヲ挾ミ、水清クシテ流穏カナリ、樹ヲ河岸ニ植エ、磚瓦ヲ道ニ敷ク、蘭国ノ都府ハ、一種ノ術法ニテ、河渠（運河の意――筆者注）ヲ以テ車道ニカエ、行人ハ両岸ノ街上ヲ歩ス、馬車ノ喧閙（やかましく騒がしいの意――筆者注）少クシテ、男女歩ヲ拾フテ行ク、故ニ街上甚タ清潔ナリ、日ニ道ヲ塵ヲ洗ヒ、時アリテ車来レハ、轔轔（車のがらがらと走る音の意――筆者注）ノ声ハ遠キニ至ルマテ聞ユ、中ニモ此府ハ貿易ノ盛ナル地にアラサレハ、殊ニ清潔ヲ完クスルヲ得ル、真ニ講文ノ郷（学府の意か――筆者注）ニヨロシ

（『米欧回覧実記』）

市街の舗石（bestrating）についていえば、わりと大きな石を敷きつめてある所もあるが、場所によっては細長い



旧王立古代博物館（筆者撮影）

瓦が敷いてある。『米欧回覧実記』の事実上の執筆者久米邦武の観察は精緻である。

一行はまず「王立古代博物館」（Het Rijks Museum van Oudheden）から見学を開始したようだが、館長のC・レーマンス博士の案内で館内を一覧したようである。『アムステルダム新聞』（Amsterdamsche Courant 一八七三・三・三?）に次のような記事が出ているからである。

二月二十八日　ライデン

今日の午後、ハーグに滞在している日本使節の一部はライデンを訪れた。先ず最初に館長C・レーマンス博士の案内で「王立古代博物館」を一覧したのち、「フェルハーフ・ホテル」で昼食をたべ、次いで「王立人類博物館」を訪れた。

また同紙には次のような記事がみられる。

二月二十八日　ハーグ

日本使節は本日、ポンペ・ファン・メールデルフォールト医師を伴ない、馬車でライデンへ遊覧に出かけ、当地にあるいくつかの王立施設、コレクションおよびその他の珍しい物を見学したのち、午後ハーグに帰って来た。

「王立古代博物館」は当時ブレーストラート Breestraat——ライデン市の主要な通り——二十八番地（現在の十八番地）にあり、隣接した家を合併して博物館（〃シーボルトの日本博物館〃とも呼ばれた）としたものである。この番地の建物は現在は博物館として使用されてはいない。展示品の全ては今、国立民族学博物館に移されている。

フェルハーフ・ホテル（正面中央の建物）

一行が昼食を取るために寄った「フェルハーフ・ホル」（Hotel Verhaaff）は「オテル・ル・リヨン・ドオール」（Hôtel le Lion d'Or）とも呼ばれ、客室数は二十四、場所はブレーストラート二十四番地（旧番地）にあった。もと「王立古代博物館」（〃シーボルトの日本博物館〃）と今の郵便局がある中間に位置している。現在はホテルとして使用されていない。

一行がこの日、まず見学したという「王立古代博物館」では大小のさまざまな動物の剝製などを見たが、とくにシーボルトが日本から送った猿や鵜などにも注

意を惹かれたようである。

○此府ノ大学校ニ附属セル博物館ハ、諸物ノ討捜（討って得た意か――筆者注）ニ富タルコト、欧陸地ニ於テ高名ナリ、此日先ツ此館ヲ回覧ス、動物ノ室ニハ、巨大ノ尤物（特にすぐれたものの意――筆者注）ヲ中央ニオキ、或ハ之ヲ鈎下ス、細小ノ群物ハ、左右ニ玻璃（ガラスの意――筆者注）ノ棚ヲ設けて陳羅ス、象ノ大ナルハ一丈五尺ニ及フ、犀ノ大ナルハ一丈ニスク、此等ヲ魁トシテ、巨獣数十アリ、ミナ乾蔵法ニテ貯ヘ、又獣角ヲ集ム、角ノ形状、種種幾十百様ナルヲ知ラス、（中略）日本ノ動物ハ甚タ稀ナリ、此館ニ猿類ノ無尾ニシテ赭顔（赤い顔の意――筆者注）ナルヲミル、之ヲ問ヘハ、即チ「シーボルト」氏日本ヨリ送リ致セシモノナリ、猿類ハ多ク熱帯地方に生ス、総テ日本ノ種類ト同シカラス、此館ニ蓄ヘタル内ニワ、日本猿類モ頗ル多シ、其他禽鳥（とりの意――筆者注）類ニハ、鵜ノ内ニ亦日本ノ鵜アリ、鵜ヲ馴使スル術ハ、支那ノ発明ナリト云

（『米欧回覧実記』）

その他、南アメリカ産の鳥類・びん詰めの魚、クモ・虫蛾なども一覧した後、別館に移り、そこではバタビアの石像、エジプトの石棺およびミイラをはじめ、ギリシャやイタリアの古器物などを見学した。

一行は昼食後、再び馬車に乗り、こんどは「王立人類学博物館」（Rijks Ethnographisch Museum）を訪れたようである。この博物館はブレーストラートのずっと東、ホーヘウルト百八番地に一九三〇年代まであったようだが詳びらかにしない。[12] 同館の収蔵品は今の国立民族学博物館へ移管されたものか。なんでも南太平洋、オーストリア、蘭領東インド、シャム、支那、日本などの器物を幅広く収集していた。

使節団はこの博物館で主にシーボルトの日本コレクションを見たようである。狩野派の絵師が描いた金屏風、日本や支那の貨幣、和蘭対訳書などを見学したが、ライデンで一見の価値がある博物館はこの一館だけであったようだ。

1870年代のハーグ（筆者収蔵）

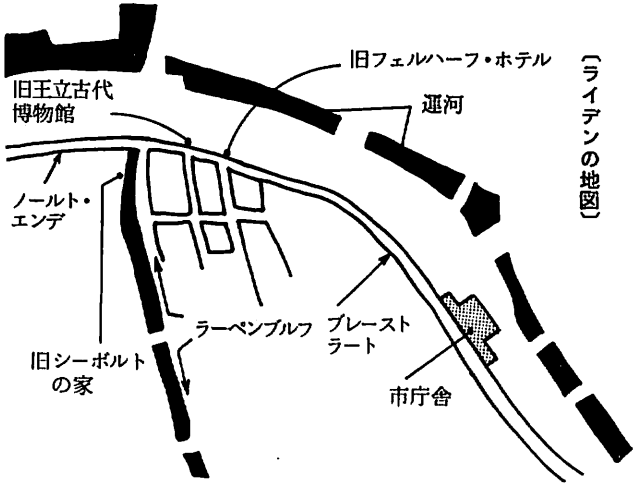
○東南洋ノ博物館アリ、是ハ首トシテ「シーボルト」氏ノ集メタル、日本ノ諸物品ヲ蓄ヘ、数室ニ充ツ、已ニ十余年ヲ経タルハ、多ク色変シ、形傷レテ、見ルニ足ラス、画ハ拙画（まずい絵の意か――筆者注）多シ、狩野家某ノ馬ヲ画キタル金屏風一双アリ、頗ル佳ナリ、西洋人ハ甚タ此画ヲ珍賞シ、名手ニ非レハ能ハスト称嘆スルトナリ、貨幣ヲ集メテ甚タ備ル、只少シク支那銭ヲ混シタルヲ遺憾トス、西洋人ハ支那日本ノ史伝ヲ熟知セサルニヨル、一千八百〇六年ニ著シタル、源某ノ和蘭対訳書アリ、「シーボルト」氏我邦国禁ノ厳ナル日ニ当リテ、多少ノ艱苦ヲ関シテ、此一館ヲ観ニ供スルモノヲ集ム、其篤志ハ賛美スルニ余リアリ、其他南洋諸島ノ器ニ至リテハ、鄙粗（つまらぬ物の意か――筆者注）ニテ看ルヘキナシ

（『米欧回覧実記』）

使節団がライデンに赴き、博物館を訪れたニュースは数日後、各紙に報じられた。が、よく見ると全文全く同じといったような記事もみられる。しかし、『スキーダム新聞』（Schiedamsche Courant 一八七三・三・六）だけは少し変わった記事を載せている。

〔日付？〕

日本使節はライデンを訪れ、とくに喜びをもって「シーボルト博物館」を一覧した。同博物館にある沢山の日本の器物や貨幣などがかれらの注意



〔ライデンの地図〕

を惹いた。貨幣やその他の目についた品々も、これまで一行にとっては全く未知のものであった。まずかれらは自分たちの国の最も古い時代の貨幣から見て行った。しかし、鋳造貨幣についていえば、かれらはそれが今の暦法のどの年代に属するものなのか断言はできなかった。

三月一日は快晴であった。使節一行は午前中、ボルスブルックを伴なって「プリンス・マウリッツホイス博物館」(Prins Mauritshuis Museum) を見学に訪れた。この博物館はハーグ市の中心に位置するビンネンホフのすぐ近くにある。十七世紀にジャン・モーリス・ド・ナソー公がヤコブ・ファン・カムペンの計画に基づいて造らせたものであるが、一度火災にあい、十八世紀に再建された。一八二一年以後、オラニエ王妃のコレクションを核として「王立絵画展示場」(Koninklyk Kabinet van Schilderyen) を併設した。同所にはフランドル派の絵画をはじめ諸外国のものまで数多く収蔵されている。

一行はまず博物館の方で、支那や日本の古器物、双頭のヘビ、竜や鬼の模造品（日本製）などを見学した。

三月一日　美晴

朝海牙ノ博物館（「プリンス・マウリッツホイス博物館」のこと――筆者注）ニ至ル、此館ニハ日本支那ノ物品ヲ集メ甚タ富ム、是ヲ以テ名ヲ著シタル館ナリト云、日本ノ物品ヲ、此館ニ備蓄セルハ、皆精美ノ品ニテ、他国ニテ未タ見サルノミナラス、日本ニアリテモ、博ク古器骨董ニ達スルモノニ非レハ、往往ニ未タ見知セサルモノ多シ、此館中ニ一奇ハ、両頭ノ蛇、竜ノ肉身、鬼ノ生首、及ヒ人魚ヲ蔵ス、皆地球上ニ曾テ無キ物ナレトモ、其状宛トシテ（その状態はまるで……の意か――筆者注）真物ヲ乾貯セルモノニ似タレハ、最初輸渡セシトキ、蘭国ノ諸博士、ミナ集リミテ、甚タ奇怪ノ思ヲナシ、竟ニ一ヲ切破リ、其肉質ヲ試ミシニ、一膜ノ裏ハ、ミナ紙ヲ以テ造レル、仮製ノ物ニテアリケリ、白昼ニ衆人諦視シ（昼間よく見ればの意か――筆者注）、其仮製ナルコトヲ覚ヘシメサルハ、日本人ノ機工驚嘆スヘシトテ、猶棚上ニ保存セリ

○支那ノ物品モ、亦精美ヲ択ミ集ム、陶器ノ精ナル（すぐれたの意――筆者注）ニ至リテハ、日本ノ古陶モ及フ能ハス、象牙ヲ精刻シテ、十二重ノ球、七重ノ球ヲ製セルアリ、重重ミナ中ニ包ミ、互ニ離レ、満面ミナ雕眼（眼をほりつけるの意か――筆者注）ヲナシ、空隙ヲ透シテ、十二ノ重重、歴然数フベシ、球ノ両枢ニ、径七八分ノ孔ヲ開ケル外ハ、全球混円ニテ、絶テ縫接ノ痕ヲミス、蓋シ一塊ノ象牙ヲ以テ、小刀ニテ外面ヨリ刻縷（刻み彫りつける意――筆者注）セルモノナリ、西洋人之ヲ観ルモノ、是両半球ヲ合縫セルモノニテ、英接合ニ秘アラント云モノ多シト、然レトモ畢竟合縫ニ成リタルトハ覚ヘス、支那人ニ間暇多ク、且彫刻ニ労苦ハ厭ハス、刀下ニ刻成セル所ナリ、西洋人ハ寸暇ヲ惜ム、慮リ此ニ及ハサルモ亦宜ナリ

（『米欧回覧実記』）

それより一行は「王立絵画展示場」に足を運び、そこで同館が誇る絵画に視線を向けた。

○夫ヨリ蔵画館ニ至ル、欧州ニ高名ナル「ポットル」氏ノ、柳陰ニ牛羊ヲ牧スル図、「レンブランド」氏ノ人体ヲ解剖スル図ノ如キ、ミナ此院ニアリ、拿破侖第一世ノ欧洲ヲ席巻セルトキ、各国ノ珍宝ヲ集メシニ、此牧羊ノ図ハ、欧州第二ノ名画ナリトノ鑑定トナリシヲ以テ、四十万弗ニテ買取ントセシニ、蘭人与ヘサリシトナリ、此図ノ大サ竪七尺、幅一丈五六尺モアルヘキ大

額面ナリ、坊間（市中の意――筆者注）ニ其縮模図ヲ油搨ニシテ鬻ク（売るの意――筆者注）

（『米欧回覧実記』）

文中にある「ボットル」とは、オランダの画家パウルス・ポテル（Paulus Potter 1625-54）のことであろう。その代表作は「小川に影を写す雌牛」や「若い牛」の主題で知られている絵である。雌牛が画面前方の小川に影を落とし、男が水浴している図であるらしいが未見。一六四八年の作品とのことである。

レンブラントの「人体解剖図」（「トルプ教授の解剖講義」）と題する絵は、一六三二年にアムステルダムの外科医の組合のために描かれたもので、アムステルダムの「解剖ホール」（Snijkamer）にこの種の他の絵画とともに飾られた。この建物は一七二三年に火災により大きな被害をうけた。[13]

絵画を一覧した一行は、午後一時にオラニエ公、ヘンドリック公らの謁見を賜わり、次いで午後二時半（三時半？）にフォールハウトにある王宮でフレデリック公の引見をうけた。この日、一行が王族の謁見を賜わったことについては、『米欧回覧実記』にわずか一行記されている。

午後ニ皇太子「プリンスオレンチ」公ニ謁ス

謁見のあと、《夕ニヌ博古館ヲ一見ス、埃及、希臘、羅馬ノ古器ヨリ、諸国ノ古器ニ及フ、来丁ニテミル所ヨリ更ニ備リテ美ナリ》ということだが、どの博物館のことをいっているのか不詳。

この日の使節一行の動静を伝える記事がある。『ライデン新聞』(Leidsch Courant 一八七三・三・三) は次のように報じている。

三月一日　ハーグ

日本使節は今日の午前中、グラーフ・ファン・ポルスブルック氏を伴って「プリンス・マウリッツ」(博物館) を見学し、続いて珍奇な器物の展示室、絵画展示場などを一覧した。今日の午後一時に使節はオラニエ公、次いでヘンドリック公の謁見をうける。一方、フレデリック公は三時半にフォールハウトの宮殿でこの高貴なる外国人らを引見する。使節は明日午前十時にアムステルダムに向い、夕方ハーグに戻ってくる。おそらく使節とその随員はこんどの木曜日一緒にハーグを離れ、プロシアへ向かうことであろう。

また『アムステルダム新聞』(Amsterdamsche Courant 一八七三・三・三) の記事は次のようなものであり、一部分『ライデン新聞』とほぼ同じ内容を伝えている。

三月一日　ハーグ

日本使節は今日の午前中にグラーフ・ファン・ポルスブルック氏を伴って「プリンス・マウリッツ」(博物館) を見学し、続いて珍奇な器物の展示室、絵画展示場などを一覧した。今日の午後一時に使節はオラニエ公、次いでヘンドリック公の謁見をうける。フレデリック公は二時半にフォールハウトの宮殿でこの高貴なる外国人らを引見する。

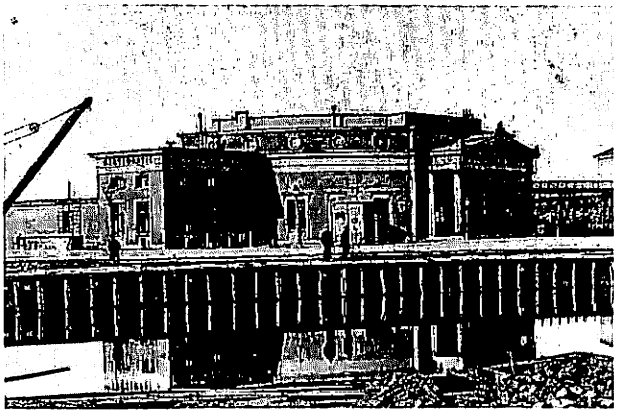
使節は明朝十時にライン鉄道でアムステルダムに向けて出発し、今夕そこから当地に戻ってくる。駐日オランダ領事であったファン・デル・タック氏によって、使節の面々は首都で正さんを供された。おそらく使節とその随員はこんどの木曜日にこれを最後にハーグを離れ、プロシアへ向う。

三月二日は曇天であった。《十時十五分ヨリ蒸汽車ニ上リ、接伴掛両人ノ案内ニテ、奄特坦府ニ赴ク》とあるから、接待委員のボルスブルックとファン・デル・タックが同行したものであろう。なお、この日は使節団のすべてがアムステルダムに赴いたわけではなく、ハーグに残った者もいたようだ。後述の『ライデン新聞』（一八七三年三月四日付）の記事に、「一行は首都で前駐日領事ファン・デル・タック氏が敬意を表して催してくれた十九人の晩餐会に臨んだ。」(In de hoofstad hebben zij deelgenomen ann een diner van 19 couverts, ter hunner eere door den consul, den heer van der Tak, gegeven.) というくだりがあるからである。

アムステルダムに向った者はライン鉄道の汽車を利用した。ハーグからアムステルダムまでの距離は五十五キロ。一行は途中、車窓よりいかにもオランダらしい風景をたん能した。――平らな広々とした土地。そこここに畑や溝や運河が見られる。遠くの森の中には田舎家が、また畑のそばには風車が見える。今でこそ風車はあまり見られなくなったが、当時はまだ沢山あったことであろう。ハーグからアムステルダムへ至る田園風景は、当時も今もそれほど大きな違いがないと思われるが、次に日本人の眼に写った当時の車窓風景をひいてみよう。

途上、ミナ平衍（広々とした平坦な土地）ニテ、溝渝（みぞの意――筆者注）縦横ニ通シ、水ハ地上ノ塢ヲ流レユク、岸ニワ楊樹（かわやなぎの意――筆者注）ヲ種ユ、楊樹ハ生長シ易キ木ニテ、萌蘖（種子から生じた芽と根株から生じた芽の意――

筆者注）ノ力強ク、之ヲ矮林（小さい樹木の林の意――筆者注）トナシ、年年ニ其枝ヲ芟取ベシ、其枝ハ、焰硝（有煙火薬の意――筆者注）ヲ製スル木炭ニ最良ナレハ、軍備ニ必要ノ産物ナリ、英仏ノ野ニモ、水岸ニハ楊樹ヲ繁育シ、岸ノ土泥ヲ固メ、伴セテ枝ヲ芟ル用ニ供スルト云、



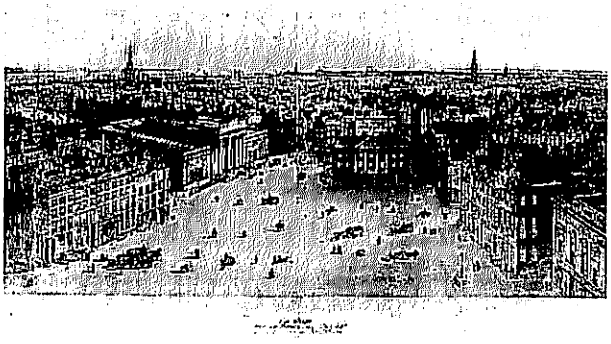
当時のアムステルダムの駅。現在の「西公園」の近くにあった。（アムステルダム古文書館蔵）

○途上ニ一条ノ長堤（長い土手の意――筆者注）ヲミル、是ハ奄特坦府ヘ漕送ノ運河ニテ、蒸汽船烟ヲ吹キテ、楊樹ノ際ヲ行ク、処処村樹ノ中、田澮ノ傍ニハ、風車ノ閃クアリ、荷蘭ノ境ハ、到ル処ミナ窪下（くぼんで低いの意――筆者注）ノ沢郷ニテ、風車ノ下ニ居住ヲナス、其光景ハ常ニ此類ナリ

（『米欧回覧実記』）

アムステルダム駅で下車した一行は、旧市街北側の港や河岸に目を向けるのだが、その地形に、はるか日本の風景――霊岸島（隅田川河口西岸の商業地区）を想起するのである。当時のアムステルダムの人口は約二十六万五千人、現在は約八十万である。

○奄特坦府ハ北荷蘭州ノ海湾首府ニテ、「シンデル」ノ海湾（Zuider Zee――筆者注）ニ控ヘタル、当国第一ノ都府タリ、昔時ハ以テ王都トセシコトモアリ、欧洲中ニテ切要ナル、貿易ノ都会ナリ、其地ハ北緯五十二度二十二分、東経四度五十三分ニ位シ、人口二十六万四千六百四十九人アリ、府中ニハ、湾海ニ注ク江港ヲ交錯シ、或ハ弓彎シ、或ハ斗出シ、水光澹トシテ（静かな意か――筆者注）、地中尺余リ下ニ湛ヘ、洲嘴（島、中洲の意か――筆者注）互ニ



1860年代のアムステルダム
正面―ダム広場―うしろの四辺形の建物が王宮
（アムステルダムの古文書館蔵）

相望ミ、峰巒（山々の意――筆者注）ノ前後ニ映対スルナシト雖トモ、樹陰倒ニ影ヲ鑑ミ（樹木が影を落しているの意――筆者注）、参差（並びつづくの意――筆者注）トシテ遠キニ連リ、水晶館（鉄骨ガラス張りの建築の意――筆者注）ヲ起シ、草花苑ヲ開キテ、水崖（岸の意か――筆者注）ノ勝ニ接連シタレハ、河岸ノ眺覧モ麗ニ、我東京深川霊岸島ノ光景ヲ緬像スルナリ（はるかに思いやるの意――筆者注）、此港ノ貿易ノ盛ナルヤ、一潮ノ来ルニ従ヒ、百艘ノ船ヲ入ルヲ常トシ、時ニハ是ニ倍蓰（数倍にふやすの意――筆者注）スルニ至ル、港中ニ碇舶セル船ハ、六百艘ヨリ少キ日ナシ、此海ニ牡蠣ヲ産ス、欧洲ノ美ナリ（おいしいものの意か――筆者注）、其価モ亦貴シ、欧人牡蠣ヲ賞美ス、蘭国以テ利ヲウク、米洲ニ於テハ、新約克ノ海岸ニ多ク生ス、往時蘭人長崎ニ来リ、肥前ノ牡蠣ヲ買フテ輸送セルモ、其利ヲ獲ルニ慣ヘル故ナリ

（『米欧回覧実記』）

それより一行は市街に入り、周囲のたたずまいに目を向ける。しかし、よく観察すれば、この市の様子は、ロッテルダムやハーグのそれと大差がないのである。けれどオランダ第一の都会だけあって、市の規模は大きく、市中に網の目のように張り巡らした無数の運河や橋、大きな石造りの建物や石畳の通りが多いことに注目し、ことに運河の前に並び続く高層の建物を見ると、そぞろに東京の隅田川河岸の倉屋敷を想い出さずにはおれなかったようだ。

街ニ入リテ、溝渠縦横ニ縈ル、鹿特坦府ニ此スレハ寛濶ナリ、全府中ニ交ハル溝渠ハ一千ニ及フ、之ニ架セル橋梁（橋の総称——筆者注）ニハ頗ル建築ノ力ヲ尽セルモアレトモ、概シテミナ木橋ニテ、中門ニ天秤ノ仕掛ヲ以テ、橋板ヲ開閉シ（開閉する意——筆者注）、溝渠ヲ漕スル船ヲ通ス、是荷蘭都府ノ橋制ナリ、市中ノ屋造（家屋の意——筆者注）ハ、多ク磚瓦ヲ以テ畳成ス、往往ニ石造屋ヲミルハ（あちこちに、見られる石造りの建物の意——筆者注）、ミナ府中有名ノ大館ナリ、白蘭二国ハ皆沢国ナレトモ（ベルギー・オランダは沼や沢の多い国であるの意——筆者注）、白国内ニハ礦物饒カナリ、又建築ノ石材ヲ出ス、故ニ其大都ニ石屋多シ、蘭国ノ礦物ハ、僅ニ陶ヲ捏スル（こねるの意——筆者注）白泥ヲ出スノミ、石造リノ材モ資スルニ由ナシ、然レトモ此大都府ノ市街ニ、往ク処ミナ石ヲ甃シテ（積みかさねるの意——筆者注）、路ヲ修メ（道路を整備するの意——筆者注）、街頭ニ広逵（大通りの意——筆者注）ヲ開キ、満面石ヲシキ、高度大屋（高い建物の意——筆者注）ヲ聳カシ、往往ニ石造ノ館ヲミル、実ニ勤メタリト云ヘシ、市中一般ノ屋作（家の意——筆者注）ハ、幅狭クシテ窓濶ナリ、高サ五層ニスキルナシ、其溝渠ノ前ニ、参差トシテ（並びつづくの意——筆者注）叢立スル模様ハ、我東京ノ江戸橋ヨリ、河岸ノ諸倉ヲ望ムニ彷彿タリ、「ヒーレン」街「カイザル」街「プリンセングラーカ」ノ三大街ハ（Heeren-Gracht, Keisers-Gracht, Prinsen-Gracht のこと。gracht は「運河」の意。これらの運河は十六、七世紀に造られた——筆者注）、欧洲ノ大府中（大都会の意——筆者注）ニテ、高名ノ街ト此肩スルニ足ル、府中ノ地、水平ト相距ル尺ナラサルモ、屋ヲ起スニハ、亦必ス地中ノ窖ヨリ始ム、瓦石（かわらと石の意——筆者注）ヲ畳ミテ水湿ヲ拒ミ、其内ヲ以テ蔵トシテ物ヲ蓄ヘ、或ハ人ヲ住マシム、西洋一般ノ風ト異ナルコトナシ

（『米欧回覧実記』）

次いで一行は建物の地下室（Kelder）について説明を受けるのだが、日本の土蔵との異同に注意を払っている。《日本ニ土倉ヲ建テ、火災ニ備フ如ク、西洋ニハ屋下ニ窖ヲ造リ、物ヲ蓄フ》と述べている。アムステルダムの建物の多くが「地下室」を持っているのは地価が非常に高いことによるという。西洋人は地下室を造るにしても、《瓦料ノ泥ヲ択ミ、石材ノ質ヲ択ミ》て、湿気を防ぐことに努め、地下にても快適さを失なわないように配慮するが、日本

人は湿気とか快適さそのものにはあまり心をくばらない、といっている。

市内に入った一行はダムラック（Damrak）の通りを馬車で進み、ダム広場前の「王宮」（Het Paleis）を先ず見学に訪れたようである。この建物は一六四八年にヤコブ・ファン・カムペンによって着工され、一六五五年に八百万フロリンの巨費を投じて完成したという。四辺形の擬古典的な建物で、基礎工事の際には一万三千六百五十九本ものくいを使用したとある。[14] 最初は市役所として用いられたが、ルイ・ナポレオン治世下の一八〇八年に王宮となった。

この王宮については『米欧回覧実記』は次のようにいう。

○奄特坦ノ王宮ニ至ル、宮ハ府ノ中心ニアリ、長サ二百八十二尺、広サ二百三十五尺、高塔ノ秒ハ高サ百二十尺ニ及フ、元ハ府ノ町会所ナリシヲ、修メテ以テ王宮トナセリ、今ニ其時ノ会議堂ハ、存シテ宮内ニアリ、二百年前ノ建築ニカヽル、宮ノ内景ハ、金色眩爛ナラス、只白石皜然トシテ（白く輝くの意か――筆者注）、窓明カニ室深ク、却テ清麗ヲ覚フナリ、画額ヲ以テ飾レル室アリ、文絹ヲ以テ張レル壁アリ、其尤モ広敞ナルハ（広々としてさえぎるものがない意――筆者注）会食堂ナリ、正ニ高塔ノ下ニ位ス、其穹宇（丸天井の意か――筆者注）ノ高サ十丈ニ及フ、此頂心ヨリ金ノ長鎖ヲ以テ、瓦斯燈ノ大叢枝（シャンデリアの意か――筆者注）ヲ釣下ス、金牀ハ寄木板ヲ張リ、円活（なめらかな意か――筆者注）ニテ足ヲ失ハントス、此ハ先代未ダ海牙ニ都セサル以前ノ王居ニテ、遷都ノ後モ、猶修治シテ以テ別宮トナセリ

王宮内を一覧した使節らは「美術館」を訪れたが、その建物の名称についてはわからない。『米欧回覧実記』には、《○集画館ニ至ル、名画古画ヲ二層ナル高宇ノ楼ニ蓄フ、常ニ府中ノ画人来リ、就テ摸写シ、其法ヲ学ヒテ、美術ヲ講究スル為メニ設ク》とあるだけではっきりしない。おそらく「王立博物館」（Rijksmuseum）の前身か、「フォド

ル博物館」(Fodor Museum) を訪れたのではなかろうか。前者の創設は一八〇八年にさかのぼり、現在の建物は一八七六年から八五年にかけて完成した。後者は一八六〇年にフォドルが創ったもので、場所はケイセルス・フラフト六百九番地(旧番地)[15]。

一行は美術館の見学をおえてからホテルで昼食をとっている。

「アムステル・ホテル」ニ至リ、昼餐ヲ弁ス、此ハ港江三叉(三筋に分かれた所の意——筆者注)ノ前ニ建テタル、五層ノ大館ニテ、府中ニテ一二ヲ争フ旅館ナリ、窓棚ミナ(すべての窓ガラスの意か——筆者注)水光雲影ヲ入レ、水晶館前ニ兀立シ(つき出て高くそびえ立つ意——筆者注)、柳垂レ草媚ヒ(楡の木がたれ、草が美しい意か——筆者注)、水紋瀠瀠トシテ(水面におこる波紋がゆらいでいる意——筆者注)、烟霞ヲ拖き(もやがたなびく意か——筆者注)、船舶ノ往来スルヲミル、府中ノ風景ノ地ナリ

(『米欧回覧実記』)

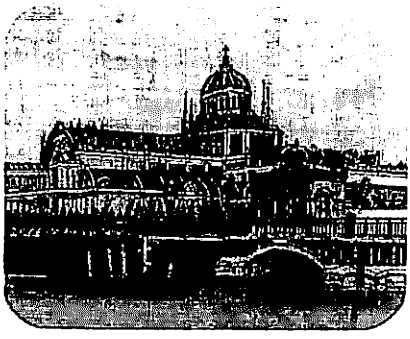
文中の「アムステル、ホテル」とはサルパティ・ストラート Sarphati-Straat の角、トルプ広場 Tulp-Plein 一番地(旧番地)の Amster Hotel のことである。近くにはアムステル川が流れている。当時は、二百室もある一流ホテルであったようだ[16]。このホテルは現存する。

「水晶宮」とは Crystal Palace(水晶宮)のことで、鉄とガラスを主体とした建物のことである。フレデリック広場 Frederiks-Plein にあったが、今は無く、その跡地は「オランダ銀行」となっている。「水晶宮」はアムステルダムでは Paleis voor Volksvlijt(〝国民工業館〟ほどの意)と呼ばれていたようで、コルネリス・アウッホールンが造

り、カフェ・ホール・劇場・売店・展示場などが入っていた。丸屋根の高さは百九十フィートあったという。[17]

この建物については『米欧回覧実記』は次のようにいう。

○水晶館ハ、当府ニテ鼻目トスル壮美ノ館ナリ、以テ遊衍ノ場（遊びたのしむ場所の意――筆者注）ニ供ス、中央ニ巨塔（ドームのこと――筆者注）ヲ起シ、全屋ミナ鉄ヲ以テ、幹トシテ、玻璃（ガラスの意――筆者注）ヲ以テ覆フ、皎瑩ニシテ（キラキラ光っていて美しい意か――筆者注）甚タ浄シ、英国水晶宮ノ小ナルモノナリ、中堂ヲ広廊ニシテ、木板ヲ以テ下牀（ゆかの意――筆者注）トシ、正面ニ楽壇ヲ設ク、此日正ニ一幇ノ楽隊、楽ヲ調シ、府中ノ遊人、男女集リ聞キ居タリ、頗ル闘劇ナリキ（にぎやかの意か――筆者注）両側ノ廊ニハ、酒、茶、呵啡ヲ販クモノアリ、又一二ノ画房アリテ、名画ヲ羅張ス（広げ並べる意か――筆者注）（後略）



水晶宮（「国民工業館」）
（『米欧回覧実記』より）

「水晶宮」を一覧した一行は、次いでアムステルダム名物のダイヤモンドの磨砕所」（研摩工場）を見学に訪れている。

○金剛石ノ磨砕場ハ、府中ノ第一ナル高名場ニテ、欧洲各国ニ於テ、金剛石ノ流行ハ甚タ盛ンナレトモ、是ヲ磨琢シ粋玉トナスコトハ、此場ニ非スハ、成ス能ハストナン、此場ハ四十年前ニ「コストル」氏ナルモノアリ、仏国ノ領事官トナリ、初メテ此製造場ヲ建起セリ、現ニ職人ヲイル、日ニ三百十五人、蒸気ノ輪三十六馬力ナルヲ安シス（後略）

（『米欧回覧実記』）

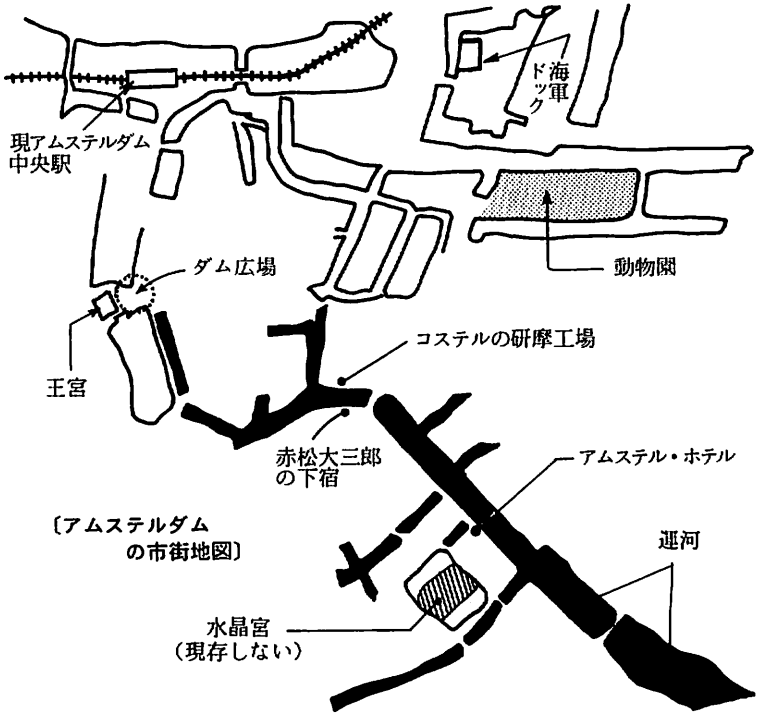
ダイヤモンドの研摩見物は、今もアムステルダムの観光の一つになっており、現地の売店で求める人も多い。この市で研摩が行なわれるようになったのは十六世紀のことで、ポルトガル系ユダヤ人がその技術を持たらしたといわれる。戦前には研摩工場が七十ほどもあり、約一万人ほどの職人がその仕事に従事していたという。

研摩工場（diamantslijperij）が集中していたのは、スワネンブルヘル・ストラート（Zwanenburger Straat）とルステルス-エイラント（Roesters-Eiland——アムステルダムの東部——アフテルフラフト運河 Achtergracht に面した通り）である。スワネンブルヘル・ストラート十二番地（旧番地）にあったM・E・コステル（Coster）の研摩工場である。ここはアムステルダムで一番古い工場であったらしく、観光客も絶えず訪れた。[18] たしか今はこの場所に工場は無く、あたり一帯の家屋はとりこわされて空地になっていたように記憶している。ちなみに近くにアムステル川が流れており、その川の対岸ビンネン・アムステル・ストラート百八十番地（現在の番地）の家こそ、幕末のオランダ留学生赤松大三郎（則良、のち、海軍中将、男爵）の下宿があった所である。

一行は、博物館・水晶宮・ダイヤモンド工場以外にも諸処方々を見物したと考えられるが、馬車で一周し、ちょっと立ち寄った所は公園・海軍省・ユダヤ教の礼拝堂（市内に十カ所ある）・海軍ドック・アムステルダム銀行・オランダ商事会社などであったろうか。いずれにせよ、ゆっくり見学する時間はなかったようである。

此外府中ニ於テ回覧スヘキハ、「パーク」、海軍局、猶太寺、及ヒ船廠等、ミナ著名ナリ、奄特坦銀行、東洋商会[19]（第五十三巻ニ出）等ハ、甚タ盛大ナリ、此日ハ時促シタレハ、一一ニ回覧ニ遑アラサリシ

（『米欧回覧実記』）



〔アムステルダムの市街地図〕

やがてアムステルダム見物をおえた一行は、ファン・デル・タック宅での晩餐会に臨んだのち、午後九時半の最終列車でハーグに戻った。

○是ヨリ車ヲ回シ、接伴掛「ハンデル・タック」氏の宅に赴ク、夕饌ノ享アリ、九時半ニ汽車ニ上リ、十一時ニ帰館ス

（『米欧回覧実記』）

使節団のアムステルダム訪問は、翌日と翌々日の新聞に報じられた。たとえば『ライデン新聞』（Leidsche Courant 一八七三・三・四）は次のような記事を掲げている。

三月三日　ハーグ

昨日アムステルダムを訪れた日本使節の面々は、同夜ハーグに戻った。一行は首都で前駐日領事ファン・デル・タック氏が敬意を表して催してくれ

た十九人の晩餐会に臨んだ。

昨日、王国の首都（ハーグ）で珍しい物を沢山みた高貴な外国人らは、その宴席に出れなかった。かれらは明後日、いろいろ見るために再びアムステルダムに赴くことであろう。

三日は薄曇りであった。一行は午後、ポルスブルックの案内でハーグ郊外フォールスホーテン（Voorschoten）にあるファン・ケンペンの「王立オランダ金銀器製造工場」（Kon. Nederl. Fabriek van gouden en zilveren）を訪れた。この会社は一八三五年に創設されたものらしい。[20]

三日　薄陰

二時ヨリ馬車ニ駕シ、「フロスブロク」氏ノ案内ニテ、海牙ヨリ東北ニ走ル五英里許ニテ、「ボーシポテン」村ニ至リ、銀器ノ製造ヲミル

と『米欧回覧実記』にある。同工場の持主・位置・規模その他については、次のようにある。

「ファンパン」氏（不詳、ファン・ケンペンのことか？――筆者注）ノ銀器製造ハ、村中ニ一区ノ地域を占メ、樹ヲウエ草ヲ植エタル苑中ニ、幽雅ナル屋宅ヲ建ツ、即チ其私宅ニテ、此背ニ一宇ノ製造場アリ（工場が一棟ある意か――筆者注）、四十年前ニ剏建ス、場内三十馬力ノ蒸気輪ヲ設ケ、職人ヲイル、百五十五人ナリ、銀ハ独逸ヨリ輸入ス、此ニテ製スルハ純銀ノ細工多シ、器機ハ英国ノ北明翰府ヨリ仕入タルモノ多シ

一行はこの工場で電気による銀の溶解方法、器面に彫刻する器械などを一覧したのちハーグに帰った。

同夜、一行は外務大臣主催の晩餐会に出席したのち、「王立フランス劇場」(Koninklijken Franschen Schouwburg) で観劇した。この劇場は後年の「王立劇場」(Koninklyke Schouwburg) のことか。コルテ・フォールハウト (Korte Voorhout) に面し、「オテル・ポーレ」の斜め向いに位置している。この日の日本使節の動静は『ライデン新聞』(Leidsche Courant 一八七三・三・五) が伝えている。

三月四日　ハーグ

昨日の午後、日本使節はフォールスホーテンにあるファン・ケンペン氏の「王立オランダ金銀器製造工場」を訪れた。使節は今日の午後二時半に再びフレデリック公の引見をうける。もと駐日オランダ公使であったグラーフ・ファン・ポルスブルック氏は自宅において使節らに晩餐を供し、一方、ヘンドリック公はこんどの木曜日にこの高貴な外国人らに敬意を表して晩餐を与えることであろう。

三月三日　ハーグ

本日、使節らは自分たちに敬意を表して催してくれる大晩餐会に出席することであろう。その折、政府の高官らも招かれる。一方、使節らは今晩、「王立フランス劇場」に観劇に赴く。フレデリック公は今回、客人の使用に供するため、自分の仕切り席を譲った。水曜日、使節らはフレデリック公主催の「クジャクの家」における晩餐会に招待されている。

(『ライデン新聞』一八七三・三・四)

四日も薄曇りであった。『米欧回覧実記』はいう。

四日　薄陰

外務省ニ於テ応接、

夕ニ海牙ノ王宮ヲ回覧ス、夜元日本公使「フロスブルク」氏ノ宅ヨリ招宴アリ、

前掲書にみられるこの日の記載事項はこれだけである。この日、岩倉大使と伊藤副使は通訳として栗本貞次郎（幕末のフランス留学生）、筆記役として田辺太一らをともなって外務省を訪れ、大臣ヘリッケ・ド・ヘルウェネンやオランダ弁理公使ファン・デル・フゥーフェンらと条約改正問題で協議をこらした。

会談の席上、岩倉大使は条約改定の期限にも達していること、貴国政府の「御見込の程」をお聞きかせいただきたいといい、日本は封建制度を廃し、民一統の政治を行なうようになったが、これまでの条約では「自然独立の国の権利を損」い、不都合もあるので改正いたしたい、と述べた。

これに対して、オランダ側は「是迄条約の儘にて先充分」といい、条約の改変は当方にとっても不都合があるとし、貿易の簡便、内地旅行と開港場の増加、キリスト教の解禁などを勧告した。さらに日本に行政・司法の区別がなく、裁判権が地方官の手にゆだねられており、かつ裁判所規則も確立しておらず、外国人の訴訟に不都合があることを指摘した。

岩倉はお話ごもっとも、近くその辺にも大改革を加え、司法権を独立させ、一局面を開き、文明各国の規準に合わせ規則を設けるつもりであると答えた。[21]

またこの日、日本側より「馬関償金の件」（明治政府にひきつがれた、米・英・仏・蘭四カ国に対する賠償金の未払い分百五十万ドル）で、残額を免除して欲しい旨をしたためた書面が提出された。が、一行がその回答に接したの

はペテルスブルクに到着したときであった。文面には、オランダ政府は英仏両国政府と同じ理由で、日本政府に免除を求める理由がない、とあった。(22)

一方、オランダの新聞によると、午後二時半に日本使節はフレデリック公の引見をうけたとあるから、木戸と大久保らが拝見を賜ったのかも知れない。おそらくこの日、使節らは二手に分かれて行動したようだ。しかし、ポルスブルック宅での宴会や晩餐後のポンペ医師宅での夜会（ソワレ）には、皆出席したことであろう。

『新ロッテルダム新聞』(Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・三・五) は、当日の日本人の動静を次のように伝えている。

三月四日　ハーグ

本日の午後二時半、日本使節は再びフレデリック公の謁見を賜う。もとオランダ駐日大使であったグラーフ・ファン・ポルスブルック氏によって、本日、その私宅において日本使節に対して晩餐が供された。一方、フレデリック公は、こんどの木曜日にこの高貴なる外国人らに敬意を表するために正餐を供するであろう。

また『アムステルダム新聞』(Amsterdamsche Courant 一八七三・三・七) の記事はこうである。

三月五日　ハーグ

昨日、グラーフ・ファン・ポルスブルック氏が敬意を表して私宅において催した晩餐会に出席した日本使節の面々は、そのあ

と以前日本で医師を勧めたポンペ・ファン・メールデルフォールト氏宅での夜会に臨んだ。……

五日、朝からハーグの町はすっぽりと濃霧に包まれていた。が、昼すぎより霧は晴れ、薄曇りの空模様となった。『米欧回覧実記』に《此日ハ海牙ノ北方ナル、海浜ノ光景ヲ一見ス》とあるように、使節の一部（名前は不詳）はハーグ郊外の海岸保養地スヘベニンゲン（Scheveningen）へ遊覧に赴き、夜はフレデリック公主催の晩餐会に臨んだ。

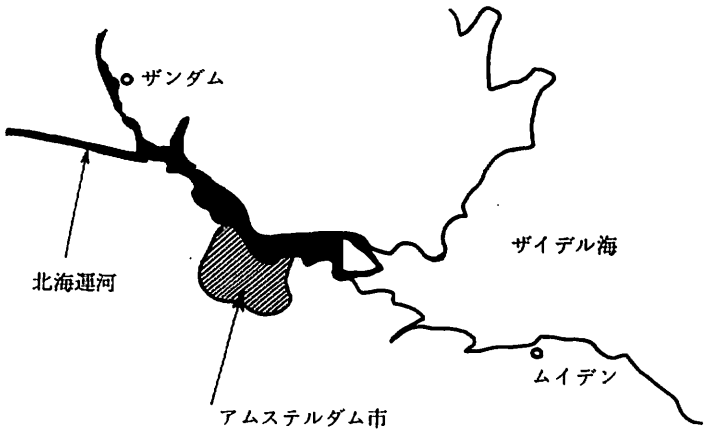
1870年代のスヘベニンゲンの海岸（筆者収蔵）

スヘベニンゲン訪問は各紙に報じられているが、『新ロッテルダム新聞』（Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・三・六）の記事は次のようなものである。

三月六日　ハーグ

昨日、使節はスヘベニンゲンを訪れ、かなりの時間を浜辺ですごした。

一方、副使の木戸らは汽車でアムステルダム近郊の片いなかに行き、開鑿中の運河を見学した。『米欧回覧実記』はいう。



木戸副使ハ、蒸気車ニテ奄特坦府ノ近方ナル鄙村ニ赴キ、新鑿ノ運河ヲミル、○此運河ハ、北海ノ浜ヨリ奄特坦マテ、二十五「キロメートル」ノ距離ナル地ヲ開鑿シ、深サ七「メートル」、幅六十「メートル」ノ河道ヲ通シ、欧洲北方ノ船舶ヲシテ、「シンデル」海程ヲ迂回セシテ、直ニ奄特坦港ニ達セシムルヘシ、此距離中ニ、陸地ハ只六「キロメートル」、其他ハ沼沢ナリ、河ノ門鑿ハ、已ニ成就セリ、当時ハ水ヲ汲ミ乾カシテ、沼沢ヲ乾土トナサント、其工作ニ多少力ヲ用フルトナリ

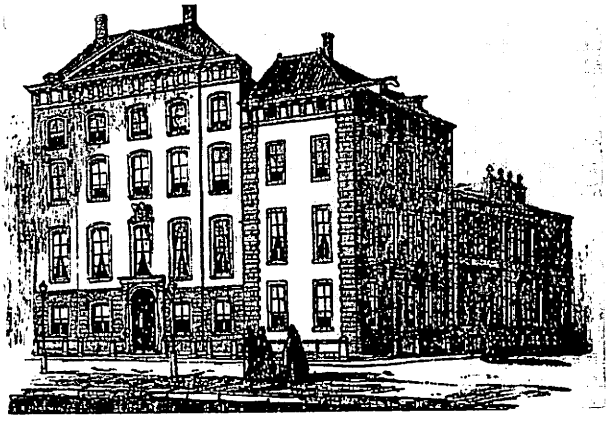
木戸一行が見学したのは「北海運河」(Noordzee Kanaal)のことであろう。この運河は一八六五年に着工し、一八七六年に完成したもので全長約十五マイル、幅六十五ヤードから百十ヤード、深さ約三十フィートある。[23] 総工費は約二千七百万フルデンであった。

それより一行は岬に築いた防波堤・運河・水門・船槽・見張り所などを一覧したが、番小屋でしばらく休息したとき、そこの住人は、日本人が来たことをたいへん喜び、酒など出して歓待してくれた。《此日ハ天薄陰ニテ、風凄其タリ、一味ノ野趣、粛疎ヲ覚フ》とあるところから考えると、当日は冷たい風が吹き荒れており、出されたオランダ焼酎（ユネバー）を一口飲んだとき、いなかびた趣と物寂しさを感じたというこ

とであろう。そのあとは《野径ヲ歩スル、一英里余ニテ、汽車駅ニ至リ、午後五時ニ帰館ス》。

木戸らが見学したものはこれで全部であったのか、それとも他に見たものがあったのか判然としないが、『ライデン新聞』（三月六日付）には「本日（三月五日）、使節の何人かは再びアムステルダムに赴き、当地のオランダ商事会社とオランダ銀行を見学した」とある。同じ内容の記事が『アムステルダム新聞』（三月七日付）にも出ている。

また『アムステルダム新聞』（三月六日付）は、使節が市内のトレスリング石板印刷会社（Tresling & C°.）を訪れたことを報じている。この印刷会社は文久遣外使節らも訪れた所であり、今はその建物は無いが、シンゲルの百八十一番地にあった。



オランダ商事会社の建物（アムステルダムの古文書館蔵）

三月五日　アムステルダム

本日、日本使節はファン・デル・タック氏の案内で当地の王室御用達の石版印刷工場であるトレスリング会社を訪れ、最大の関心をもってすべてを一覧した。

ひょっとすると一同は、最初にこれらの建物を訪れたのち、「北海運河」の方へ足を運んだものか。

この日の夜、フレデリック公の別荘「クジャクの家」(Huis de Pauw)において晩餐会が開かれた。『米欧回覧実記』はいう。

夜「プリンス、フレデレッキ」世子邸第（屋敷の意――筆者注）ニテ、饗享ヲ賜フ

フレデリック公主催の晩餐会の模様を伝える記事はいくつもあるが、『新ロッテルダム新聞』(Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・三・七）は次のようにいう。

三月六日　ハーグ

昨日、日本使節に敬意を表するために、フレデリック公によって別邸「クジャクの家」において催された晩餐会には、この高貴なる外国人のほかに宮廷の大勢の紳士淑女も招かれた。

先に述べたように、ヘンドリック公は本日、日本使節に晩餐を供することであろう。

六日は曇天であった。木戸一行はアムステルダムを再訪し、こんどは動物園を見学した。『米欧回覧実記』は次のようにいう。

六日　陰

此日木戸副使ハ奄特坦府ニ赴キ、禽獣園ヲミル、此禽獣園ハ、欧陸ノ地ニテ、第一ノ評ヲ得タル所ナリ、園中ミナ平地ニテ、

山丘ノ設ケナケレトモ、樹ヲ植エ池ヲ匝シテ、盤桓スヘシ（広大である意か――筆者注）、其他ニマサル所ハ、禽獣ヲ蒐集セルノ多キト、豢養（飼育の意――筆者注）ノ其術ヲ得テ、ミナ肥沢ナルニアリ

この日、一行が訪れた動物園は一般にArtisの呼称で親しまれている所である。この動物園は一八三八年に「芸術の本質」(Natura Artis Magistra) 協会によって創設されて以来、同協会の略語を採って「アルティス」と呼ばれている。[24] 広さは二十八エーカ、植物園を伴設し、ドック通り (Dok Laan) に面した所にある。現在は七千以上の禽獣が飼われているという。

一行はこの動物園で、カバ・しまうま・サル・鳥などを見たが、《禽鳥ノ類モ甚タ多シ》ということだから、当時、園内には鳥が沢山飼われていたのであろう。南アメリカ産の鶴ばかりか、日本の鶴もいたようである。また園内にある建物があって、そこに日本の器物（人形・大小の仏像など）が展示してあった。

○園中ニ一館ヲ起シ、外国ノ異貨ヲ集ム、日本の物品モ多ク集メタリ、江戸ノ生人形（不詳――筆者注）あり、銅仏像大小数アリ、ミナ日本ニアリテハ精工ト称セラルレトモ、此内ニアリテハ、何啻ニ倍父（いなかおやじの意――筆者注）ノ面目ノミナランヤ

（『米欧回覧実記』）

一行はこのほか、熱帯の動物（ヘビ）や植物などを養う建物（温室）なども見学したが、室へはパイプで蒸気が送り込まれていたという。しかし、一行が興味を惹かれたのは《魚児ヲ養フ室》（「養魚場」）であった。

魚ヲ養フハ、樹ヲ育スルカ如シ、土性ノ肥瘠ヲ相シ、養魚ノ池ヲ造リ、温度陽光ヲ差シ、風ヲ防キ雨ヲ収メ、水草ヲウエ森林ヲ蔭シ、肥壮ノ魚、雄雌ヲ放ツテ交尾セシメ、其蛋卵（たまごの意――筆者注）ヲ生セシメ、之ヲ孵化シテ鮞トナシ、別池ニ送リテ成長セシム、猶樹苗ヲ作ルカ如シ（中略）此園ニ養フ魚児ハ、即其法ニテ孵化セルモノナリ

（『米欧回覧実記』）

一行は、当園において初めて人工孵化の養魚法を実見し、見聞を広めたわけであるが、ベルリンを訪れたときも、漁業会社の展覧所で《漁業学》（「養魚法」）の施設を見学し、その知識をいっそう深めることができた。

この日の夜、使節らはヘンドリック公の招宴に臨んだが、これはいわば送別の宴でもあった。『米欧回覧実記』はいう。

夜王族「ヘンデリッキ」侯ノ邸第ニ招請アリ、饌享（ごちそうの意――筆者注）ヲ賜フ、

七日は薄曇りであった。この日、使節団はオランダを立ち、プロシアへ向うことになっていた。前日、ベルリンの日本公使館へ電報を打っておいたので、すでにプロシア政府より接待委員一名がハーグに来ていた。また日本公使館からもA. Kanzki（不詳）という者が一行の案内役としてハーグに来ていた。この日本人について『新ロッテルダム新聞』(Nieuwe Rotterdamsche Courant 一八七三・三・七）は次のようにいう。

三月六日　ハーグ

ベルリンへ向う日本使節を皇室の書記官A. Kanzkiが案内する。かれはすでに当地に到着し、「オテル・ポーレ」に投宿しているのだが、自分がやって来た目的を使節に知らせるために、使節に伺候していた。

一行は朝早く起きて、身じたくすると朝食後、早々に駅に向い、午前八時にはすでに車中にあった。

七日　薄陰

朝八時ヨリ海牙ヲ発シ、日耳曼（ゲルマン）ニ赴ク、日耳曼帝（ビスマルクのこと――筆者注）ヨリ招接トシテ、宮内ノ官員「カンスケ」氏（不詳――筆者注）、海牙ニ来リ、共ニ車ニ上ル、接伴掛両人モ亦送リ来ル、東南ヲ走ルコト一時間行、沢地ヤヽツキテ平岡トナル、沙土多ク菅腴（こやし）（土地が肥えている意――筆者注）ナラサレトモ、松ヲウエ林ヲナス、是ヨリ漸クニ平原トナリ、河道交リテ草茂セリ、「アイズム」河橋ヲコエテ、午後ニ「ベンゼイム」駅ニ至リ、此ニテ闌ノ接伴掛ハ告別シテ去レリ、

（『米欧回覧実記』）

かくて岩倉使節団は七日の朝八時にライン鉄道（Rijnspoorweg）の展望車[25]で一路ベルリンへ向った。一行を乗せた汽車はエムス川（Ems）を渡り、国境の町ベントハイム（Bentheim）に到着したとき、オランダ側の接待委員ポルスブルックとファン・デル・タックは日本人にいとまごいし、下車した。

使節団もいったん下車し、プロシア側の接待委員ライトおよびローテルサン大佐、もと駐日領事L・クニフレル（Kniffler）らの出迎えを受けたのち、再び一緒に汽車に乗った。このときすでにかなり物見高い連中が日本使節ら

を取り巻いていたようで《駅傍ノ人民、ミナ蟻群シテ見物セリ》とある。[26]

かくして岩倉使節団の十二日間にわたるオランダ訪問の旅は終わったが、この間一行は諸施設を視察し、[27]いろいろ学び得るところも大きかったと思われる。が、わが国に持たらしたその成果となると、あまり見るべきものはなかったように思われる。

外交面では、所期の目的の一つである、修好聘問の使命は一応達したものの、条約改正交渉では日本側の希望を伝え、オランダ政府の反応を見るにとどまり、さしたる進展はなかった。結局、巡歴中に各国と試みた改正交渉がいずれも不成功に終わっていただけに、日本側としては過大な期待も要求もせず、後日の交渉に期するところがあったようだ。しかし、外交的には不成功であっても、日蘭の友好親善を改めて強化することができたといえる。

使節一行の中にいた、長与専斎（一八三八～一九〇二年、幕末・明治期の医学者）は、田中不二麿（理事官）の随員として参加した者であるが、欧米各国の医学教育と衛生制度の調査研究を担当した。長与は《大使随行のみぎり和蘭ハーグにて親しく犢牛接種の方を観て深く心に喜び、その器具一式を請い受けて齎し帰りぬ。かくて明治六年の秋自ら犢牛を購い接種の方を試みたりしに、痘顆豊大にして光沢あり、思い儲けしことながらその好結果を欣びたりき》（「松香私志」）と語っているが、このとき持ち帰った「痘苗製造機」をもって帰国後、「牛痘種継所」を衛生局の事業としたことなどは、オランダ視察旅行の医学面での大きな収穫であったといえまいか。

本稿は夏期休暇中に執筆したものであるが、先年渡蘭の折に採取したオランダの新聞記事が母体となっている。最近では『米欧回覧実記』を手にし、岩倉使節団の道筋や足跡をたどる人も出て来ているが、同使節団の追跡調査と海外の新史料の発掘は今後に待たねばならない。最後に、オランダ文の解読や執筆の段階で多くの人たちのお世話にな

ったが、蘭文の義疑について教示を得た前学士院事務長の庄司光男氏、珍しい写真その他の情報をお送りいただいたアムステルダムの実業家勝山光郎氏、ファン・アローイ女史、資料収集に便宜を与えられたオランダの各古文書館・図書館に対し、記して感謝を表します。

一九八七・八・三〇

注

(1) 田中彰『脱亜の明治維新――岩倉使節団を追う旅から』の十三頁を参照。

(2) ディルク・ド・グラーフ・ファン・ポルスブルック(Dirk de Graeff van Polsbroek)は、一八三三年八月二十八日生まれ。二十歳になった一八五三年、バタビアで公証人をやっていたメインスセンのもとでしばらく仕事を手伝った後、一八五七年出島のオランダ貿易会社の二等商務員補(アシスタント)として来日。一八五九年テクストル商会の仕事に従事したが、やがてドンケル・クルチウスによって横浜の駐日オランダ副領事に任じられた。一八六一年領事に昇進。一八六三年総領事。一八六八年弁理公使となる。横浜に滞在中、江戸の茶商人の娘小山おちょう(女中)との間に一子ピィテルをもうけた。ピィテルは一八六一年七月八日横浜で生まれ、一九〇九年八月八日メナド(インドネシア中北部――北スラウェンの州都)で没した。

ポルスブルックは帰国後の一八七〇年五月、ボンヌ・エリザベト・ロイエルと結婚し、子供を六名もうけた。一八八五年三月、貴族に列せられ、一九一六年六月二十七日ハーグで死去(『ポルスブルックの日記』七三頁を参照)。

(3) ファン・デル・タック(W. van der Tak)の伝記については詳らかにしない。オランダ貿易会社々員を経て、一八六七年から七二年まで横浜駐在オランダ領事を勤めた。(フォス美弥子訳『オランダ領事の幕末維新』(新人物往来社刊)を参照。また、ハーグの古文書館に勤務するファン・アンローイ女史の教示によると、ファン・デル・タックの経歴は次のようなものである。

一八六七年三月一日……勅令第九一号により神奈川領事に任命される。

一八六九年二月二十三日……勅令第四号により江戸の領事を兼任。

一八七三年四月十二日……勅令第二一号により依願退職承認される。

(4) フェイエノールト (Feijenoord) のスティルチェ広場 (Stieltjesplein) あたりに在った船着き場を指すのか、不詳。

(5) ベディカー『ベルギー及びオランダ』(Belgium and Holland including the Grand-duchy of Luxemburg, Handbook for Travellers by Karl Baedeker 1910) の三一五頁を参照。以下、注においてはベディカーの『白闌旅行案内』と略記する。

(6) 『特命全権大使米欧回覧実記』(博聞社刊) の五十三巻、二五五頁。

(7) 『大日本外交文書』(第六巻) の三〇頁～三一頁を参照。

(8) 文久元年 (一八六一年)、幕府が欧州六ケ国に派遣した使節竹内下野守一行のこと。

(9) ベディカーの『白闌旅行案内』三三九頁を参照。

(10) 前掲書の同頁を参照。

(11) ハーグのプレイン (Het Plein) にある建物。今も紳士クラブとして用いられている。同クラブの理事としてのポンペの名は、正面の階段を上って右手の壁に刻まれている。

(12) ベディカーの『白闌旅行案内』三五〇頁を参照。

(13) ベディカーの『白闌旅行案内』三九一頁を参照。

(14) ベディカーの『白闌旅行案内』三七二頁を参照。

(15) 前掲書の三七八頁を参照。

(16) ベディカーの『白闌旅行案内』三六二頁を参照。

(17) ベディカーの『白闌旅行案内』三七九頁を参照。

また慶応四年 (明治元年) 春、この「水晶宮」において、日本の芸人による〝見せ物〟が行なわれた。どの位の期間連続興業されたものか分らぬが、開演の広告が新聞 (『アムステルダム新聞』?) に出ている。

広告の大見出しは《臨時ニュース》(Voorlopig Berigt) といった大袈裟なもので、日本帝国の一座が、競技・軽業・綱渡り・こま回し・手品等を演じること。国民工業館 (「水晶宮」) での初演は、一八六八年三月七日 (土曜日)。入場料は五

十セント、いす席は一フロリン。木戸は七時に開くが、開演は八時（夜興業か？）とある。なお、原文は次のようなものである。

VOORLOOPIG BERIGT.
RISLEY'S & VAN GIESON'S
Keizerlijk Japansch
Gezelschap,
VAN
ATHLETEN, ACROBATEN, KOORDDANSERS, TOL-
SPELERS, GOOCHELAARS, ENZ.
Iste Voorstelling in het
PALEIS VOOR VOLKSVLIJT,
Op ZATURDAG 7 MAART 1868.
Entree 50 Cents, Stalles *f* 1.
Aanvang 8 Ure. De deuren worden ten
7 Ure geopend.

(18) 前掲書の三七六頁参照。
(19) オランダ商事会社のことか。場所はヘーレンフラフト Heerengracht 四六六番地。建物は健在。写真（銅版画）を参照。
(20) ベディカーの『白蘭旅行案内』に「村の右手に教会の塔のようなものが立っており、そこは銀器工場として知られている所である。（一八三五年創立）。」とある。おそらくファン・ケンペン Van Kempen の工場を指すものと考えられる。
(21) 『大日本外交文書』（第六巻）の九八頁～九九頁を参照。

(22) 石井　孝『明治初期の国際関係』の九一頁～九二頁を参照。
(23) ベディカーの『白蘭旅行案内』四〇六頁を参照。
(24) 前掲書の三七六頁とミシュラン『オランダ』の五八頁を参照。
(25) 『アムステルダム新聞』（一八七三・三・七）には Vrijdag morgen ten 8 ure vertrekt het gezantschap in een salonwagen over der Rijrspoorweg naar Berlin.（金曜日の午前八時に、使節はライン鉄道のサロン式一等車でベルリンへ向けて出発する）とある。
(26) 『特命全権大使米欧回覧実記』（第五十六巻――普魯西部鉄道ノ記）を参照。
(27) 岩倉使節団がオランダ滞在中に訪れた場所は、いずれも文久遣外使節らも訪れた所である。いずれ同使節について何か書く機会もあろうかと思う。

主要参考文献

『特命全権大使米欧回覧実記』（五巻）太政官少書記官久米邦武編修、御用刊行所、博聞社、明治十一年十月刊行。
久米邦武編 田中彰校注『特命全権大使米欧回覧実記』岩波書店、昭和五十四年十二月刊。
『脱亜の明治維新――岩倉使節団を追う旅から』田中　彰著、講談社、昭和五十二年十月刊。
『岩倉使節団』田中　彰著、日本放送出版協会、昭和五十九年三月刊。
『岩倉使節の研究』大久保利謙編、宗高書房、昭和五十一年十二月刊。
『オランダ領事の幕末維新』フォス美弥子訳、新人物往来社、昭和六十二年八月刊。
『大日本外交文書』（第一、四、六巻）外務省調査部編纂、日本国際協会、昭和十一年～十四年刊。
『木戸光允日記』（非売品）、昭和六年六月刊。
『岩倉公実記』（中巻）、多田好問編、原書房、昭和四十三年五月刊。
『伊藤博文伝』（上巻）、春畝公追頌会編、原書房、昭和四十五年九月刊。
『松本順自伝・長与専斎自伝』小川鼎三・酒井シズ校注、平凡社、昭和五十五年九月刊。

中村尚美「木戸孝允のもたらせるもの」(『日本歴史』第五十九号)。
渡辺幾次郎「木戸孝允の欧米巡遊とその成果」(『日本歴史』第三十七号)。
伊香輪純子「岩倉全権大使の条約改正交渉」(『歴史教育』第九巻第一号)。
安岡昭男「岩倉使節の派遣とその成果」(『歴史教育』第十四巻第一号)。

Charles Lanman: Leaders of the Meiji Restoration in America, The Hokuseido Press, 1931.
Karl Baedeker: Belgium and Holland including Grand-duchy of Luxembourg, Handbook for Travellers, Karl Baedeker Publisher, 1910.
Karl Baedeker: Northern Germany, excluding the Rhineland, Handbook for Travellers, Karl Baedeker Publisher, 1925.
Journaal van Jonkheer Dirk de Graeff van Polsbroek 1857–1870, van Gorcum, Assen／Maastricht, 1987.
Les Guides Bleus Holland, Librairie Hachette, 1950.
Michelin Hollande, Pneu Michelin, 1979.
Amsterdamsche Courant (1873. 2. 25〜3. 8)
Nieuwe Rotterdamsche Courant (1873. 2. 25〜3. 8)
Leidsche Courant (1873. 2. 25〜3. 8)
Schiedamsche Courant (1873. 2. 25〜3. 8)

Brief Notes on the Iwakura Mission in the Netherlands.

The dispatch of Prince Iwakura's embassy to America and Europe in 1871 was one of the remarkable events in the modern history of Japan. The idea of sending a mission abroad originated with Shigenobu Ōkuma (1838–1920) who was Gaikokukanfukuchiji (i. e. vice–minister of Foreign Affairs) in 1869. In his younger days at Nagasaki, where Ōkuma was sent as a selected student of the Saga clan, he attended lectures in politics, economics and jurisprudence given by a missionary named Guido H. F. Verfeck (1830–98), an American of Dutch extraction.

This missionary came up to Yeddo (present day Tokyo) in 1869 on the invitation of the new Imperial Government to act as a advisor to the government. He was often asked his opinions concerning conditions abroad. It was just before or after June 1869 that Ōkuma had an interview with Verfeck, on which occasion Ōkuma expressed his long-cherished idea of sending a mission to America and Europe. A little later Verfeck privately sent to his former student and friend, Ōkuma, a proposition known as 'a brief sketch' in which the full particulars of the plan were written. Verfeck asserted emphatically the importance of observing for themselves the actual state of affairs in the West in order to understand Western culture and institutions. Two years, however, passed without Ōkuma's ideas being realized while the government was embarrassed by the approach of the time for the revision of all the foreign treaties. It seemed to be still premature to dispatch a mission because the ideas of the general public were in confusion and the country itself was in social turmoil

following the Restration. The Junior Prime Minister Tomomi Iwakura (1825–83) learnt by chance of Verfeck's proposition, and he asked him to call on him. It was on the 26th Oct. 1871 that Iwakura had an interview with him, asking about the contents of 'a brief sketch'. When the Embassy was organized according to Verfeck's suggestions and was about to leave Yokohama for America, Ōkuma was, contrary to his expectations, removed from the members of the mission by a joint conspiracy of the Satsuma and the Choshu clans.

Iwakura was ordered to be the Chief Ambassador of the Embassy by the emperor. The chief object of the mission was to present a message from the emperor to the president or the kings in America and Europe as well as to ascertain the intentions of the treaty Powers and to investigate Western society in terms of its legal, social, cultural, and military conditions with a view to placing Japan on an equal basis with the advanced Western countries in the future.

The Japanese Embassy, which is commonly called the 'Iwakura shisetsu dan' (i. e. the Iwakura Mission), was composed of one hundred and seven Japanese, of whom forty-nine constituted the Embassy, the others consisting of fifty-three officials, servants and students studying abroad.

The chief members composing the Embassy were as follows:

Ambassador Extraordinary

NAME AND RANK	OFFICIAL POSITION
Sionii TOMOMI IWAKURA	Junior Prime Minister
(Shonii = the junior third order of court rank)	

Vice-Ambassadors Extraordinary

Jussami TAKAYOSHI KIDO	Council of State
(Jussammi = the junior third order of court rank)	
Jussammi TOSHIMITSU OKUBO	Minister of Finance

Jushie HIROBUMI ITOH····· Acting Minister of Public Works
(Jushie=the junior fourth order of court rank)
Jushie NAOYOSHI YAMAGUCHI····· Assistant Minister of Foreign Affairs

First Secretaries

YASUKAZU TANABE····· Department of Foreign Affairs
NORIYUKI KAH·····*ibid*
ATSUNOBU SHIODA····· *ibid*
(SABUROO)
GENICHI FUKUCHI····· *idid*

Second Secretaries

HIROMOTO WATANABE····· Department of Foreign Affairs
TŌSABURO HAYASHI····· *ibid*
(TADASU)
KEIJIRO NAGANO····· *ibid*
ROKUSABURO YAMANOUCHI····· *ibid*

Third Secretaries

KANDO KAWAJI····· Department of Foreign Affairs

Fourth Secretaries

DADATSUNE ANDO····· Department of Foreign Affairs
MASAYOSHI IKEDA····· Department of Education

Private Secretary to Chief Ambassador

YASUNAKA GOTSUJI····· Board of Ceremonies

Commissioners connected with the Ambassadors

YASUSHI NOMURA····· Department of Foreign Affairs
TADAKATSU UTSUMI····· Secretary to the Governor of Hiogo
NOBUTOSHI NAKAYAMA····· Vice Governor of Hiogo
YASUKAZU YASUBA····· Duputy Commissioner of Revenue
TAKEICHI KUME····· The Cabinet
(KUNITAKE)

Kume was an author and editor of 'Tokumei-zenken-taishi Beiokwairanzikki' (in five volumes) published in the 11th year of Meiji (1878) by the Hakubunsha, Tokyo. This is a very interesting account of the travels to the United States and Europe of Ambassador Iwakura and his retinue and their keen observations during the journey.
TAKAYUKI SASAKI·····Acting Minister of the Judicial Department
Jushie AKIYOSHI YAMADA····· Brigadier-General of the Army
Jussammi MICHITOMI
HIGASHIKUZE·····Chief Chamberlain of the Imperial Court
TAMEYOSHI HIDA····· Commissioner of Dockyards
(HAMAGORO)
FURUU URIU····· Ministry of Railways
MITSUAKI TANAKA····· Head of Register Office
FUJIMARO TANAKA····· Department of Education etc,.

On the 23rd of December in 1871, the steamer 'America' carrying the Iwakura Mission left Yokohama for America and arrived on the morning of January 15th at San Francisco. After that, touring through the United States, England, France and Belgium, the Embassy left Antwerp in Belgium on the 24th February in 1873 for Holland. When the Ambassador and his retinue arrived at Roosendaal in Holland, they were received by Graeff van Polsbroek and van der Tak who were in charge of the reception commitee and set out again on their journey.

When the train arrived at the terminal station of the 'Hollandsche Spoorweg' (i. e. Dutch Railway) in Rotterdam, the Ambassa-

dor and his staff went abroad a river boat and crossed the Maas. On arriving at the wharf on the other side of the river, they started for 'Delftsche Poort' (i. e. the railway station of 'Hollandshe Spoorweg' in Rotterdam) in separate carriages. Here again they got aboard a train bound for the Hague and Amsterdam. It was at 8:20 p. m. when the Embassy finally arrived at 'Station Hollandsche Spoorweg ' in the Hague, where they were greeted by many Dutch and two secretaries sent from the Japanese Legation in Berlin. After taking a short rest in the station, they rode in separate carriages and went to 'Hôtel Paulez' prepared for the Japanese by the Dutch government.

It snowed on the 25th of January. At about 3 p. m. five carriages sent by the Imperial Household Office arrived at the 'Hôtel Paulez' together with Graeff van Polsbroek, van der Tak and Schouburg (i. e. vice-Grand Master of Ceremonies) to conduct the Embassy to the Royal Palace to be granted an andience by the king. The chief Ambassador Iwakura, vice-ambassadors Itoh, Kido, Okubo and Yamaguchi, the first secretary Tanabe, the fourth secretary Ando rode in separate carriages escorted by a cavalry squad. When they arrived there, they were welcomed by the Imperial Guards who presented arms, and a musical band. The Grand Master of Ceremonies came out in person to greet them at the door and showed all the persons to the audience chamber where King Willem the Third and his court were standing to meet them. After exchanging mutual greetings the Embassy retired from the chamber and went back to the hotel. At 9 p. m. a diplomatic reception was held by the Foreign Minister at which the Japanese presented themselves.

It rained in the day time but stopped raining in the evening of the 26th of February, the Japanese mission went to Rotterdam to inspect the 'Nederlandsche Stoomboot Maatschappij' (i. e. Dutch Steamship Company) at Feijenoord. Among the institutions the Japanese observed with great interest were shipyards, machine too-

ls, a sawmill and foundry. After the inspection they took lunch on a British mailboat moored at the Maas and on that occasion they tasted the Batavian food preserved in sugar, returning to the hotel at 4:30 p. m.

It was fine weather on the 27th of February. In the forenoon of the day the chiefs of the Embassy granted an audience to the corps diplomatique, some field officers of the artillery, a supervisor of primary education and some government officials. Then the Embassy visited the 'Departement van Marine' (i. e. the Naval Department) and the 'Huis ten Bosch' (i. e. the house in the wood) of the 'Haagsche Bosch' (i. e. a famous and beautiful wood in the Hague), being accompanied by Graeff van Polsbroek.

The weather was fair on the 28th of February. The Embassy started for Leiden at 9 p. m. under the guidance of Prof. Dr. J. J. Hoffmann of the Rijksuniversiteit of Leiden and Dr. Pompe van M eedervoort who was a physician in charge of the Japanese during their stay in the Hague. They went in separate carriages along the ' straatweg naar Leiden' (i. e. the highway which leads to Leiden) enjoying the beautiful scenery on the way. On arriving there they visited the 'Het Rijks Museum van Oudheden' (i. e. the Royal M useum of Antiquities) in Breestraat No. 28 and after that they had lunch at the 'Hotel Verhaaff' (i. e. Hôtel le Lion d'Or) in Breestraat No. 24. Next they visited the 'Rijks Ethnographisch Museum' (i. e. the Royal Ethnographical Museum) in Hoogewoerd No. 108, where the Japanese enjoyed seeing von Siebold's Japanese collection.

It was fair and clear on the 1st of March. The Embassy accompanied by Graeff van Polsbroek visited the 'Prins Mauritshuis M useum' and the 'Koninklyk van Schilderyen' (i. e. the Picture Gallery) and was received in audience by Prince Oranje and Prince Hendrik in the afternoon.

It was cloudy on the second of March. Nineteen persons went to

Amsterdam accompanied by Graeff van Polsbroek and van der Tak and visited the 'Het Paleis' (i. e. the Royal Palace) and art museums, the names of which remain unknown. After visiting these places the party of sightseers had lunch at the 'Amster Hotel' situated at Tulp-Plein No. 1. And then they visited the 'Paleis voor Volksvlijt' (i. e. the Crystal Palace) in the Frederiks-Plein. After this the visitors went to the famous grindery of diamonds owned by M. E. Coster in Zwanenburger straat No. 12. Besides these places the Japanese most probably visited or caught a glimpse of the following buildings; the 'Rijks Marine Dok' (i. e. Royal Naval Harbour), the Jewish Synagogues, the Bank of Amsterdam and the 'Hollandsche Handelmaatschappij' (i. e. the Dutch Trading Company) in Heerengracht No. 466. After finishing a tour of observation through the city, they attended the dinner party held in their honour by van der Tak, returning to the Hague by the last train at 9:30 p. m.

It was a bit cloudy on the 3rd of March. Some persons of the Embassy went to Voorschoten some 5 miles in the Northeast of the Hague to visit the 'Koninklijk Nederlandsch Fabriek van gouden en zilveren' (i. e. Royal Dutch Manufacture of gold and silver wares) and at night the Embassy presented themselves at a dinner party held by the Foreign Minister. As regards the rest of the Embassy, they were granted an audience again by Prince Frederik at 2:30 p. m.

The sky was overcast with thin clouds on the 4th of March. The Chief Ambassador Iwakura, vice-ambassador Itoh, the first secretary Tanabe and interpreter Kurimoto called on the Foreign Minister (i. e. Geriche de Herwynen) at his Foreign Office to discuss the revision of the treaty. The minister said the Dutch Government was contented with the status quo and had no intention of changing the treaty. Besides he demanded that Japan should simplify foreign trade, give free travel in the interior of the land for foreigners, open

more free ports, and lift the ban on Christianity. The other ambassadors had an audience with Prince Frederik at 2:30 p. m. and were invited to dinner at Graeff van Polsbroek's as well as to an evening party at Dr. Pompe van Meerdervoort's.

On the 5th of March, a mist lay thick over the Hague in the morning but it broke up and became cloudy by afternoon. Some ambassadors visited Scheveningen and spent a long time on the beach while vice-ambassador Kido and his retinue accompanied by van der Tak went to Amsterdam and visited 'Noordzee Kanaal' (i. e. Northsea Canal) which was still under construction and studied breakwaters, canals, sluice gates, lock gates and waterhouses. The party also visited 'Hoflithografen Tresling & Ce' (i. e. Tresling lithographic printing company under royal patronage) and inspected everything with great interest. The Embassy and others were invited to a dinner party held by Prince Frederik in the 'Huis de Pauw' (i. e. the House of Peacock) at night.

It was slightly cloudly on the 7th of March. The Iwakura M ission left the Hague for Berlin at 8 a. m. by the Rheinrailway. When the train arrived at Bentheim, a border town in Prussia, Graeff van Polsbroek and van der Tak bade farewell to the Japanese and were replaced by the Prussian reception committee.

Thus the twelve days of the trip of the Iwakura Mission in Holland was over. The Mission learned a great deal from their tour of inspection there but the results fell short of their expectations. They could strengthen the ties of friendship between Japan and the Netherlands, but they could not arrive at an understanding about the revision of the treaty. Not much is known about what they brought to Japan from this trip but it is safe to say that Dr. Sensai Nagayo (1838 –1902) rendered great service in the medical world of Japan.As a member of the Mission he was engaged in investigating both medical education and sanitary systems while traveling. While staying in

the Hague he had an opportunity to witness vaccinations and this impelled him to bring home all the appliances used for inoculation. Soon after returning home from his long journey in the autum of 1873, he established an institution called 'Gyutoshukeijo' (i. e. cow-box vaccine farm) where bovine vaccine was made and inoculated, using the appliances that he brought home from Holland. This might be the very case that the tour of inspection in the Netherlands brought a medical benefit to Japan.

In writing this essay I could make use of the Dutch Press News related to the Iwakura Mission as new materials for the study of the Embassy in Holland. Finally I would like to thank the Municipal Archives in Amsterdam, Leyden and in the Hague for their various kindness. Especially to the staff of the Royal Library in the Hague I owe the greatest debt of my gratitude.

T. Miyanaga
Tokyo, 30 August 1987.